

751-221



1200501594456

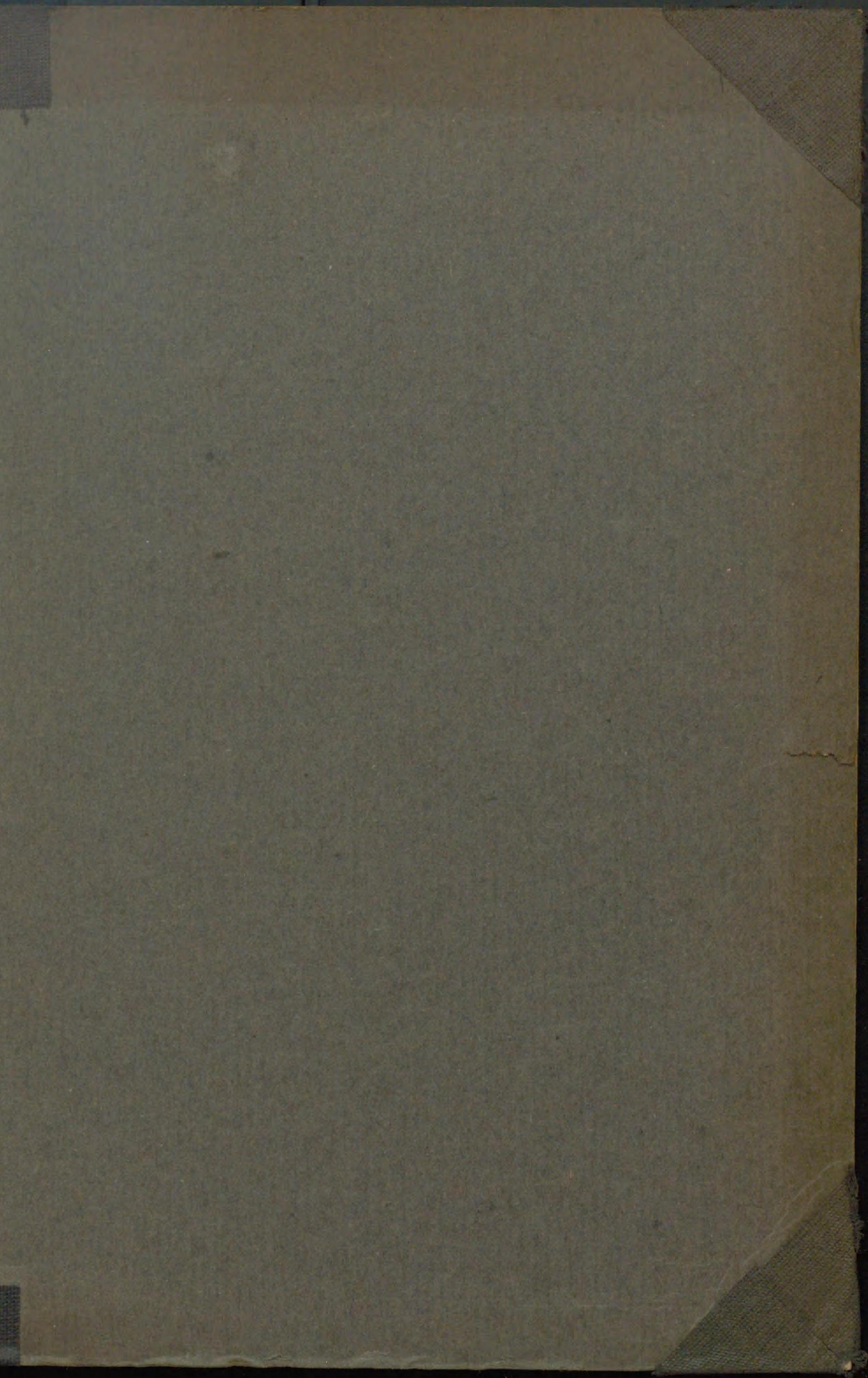
221

又作
庫品
毛髮
壽命
式場隆三郎著

751

納本
作品社

751
221



751

納本 269
作品社

751



命壽と髮毛

庫文品作



751

221

序

日本には醫者の藝術家は多いし、文筆家も多い。しかし、Pathographieをやる人は殆どない。自分はさういふ方面に向つて勉強してゆかうと思つて、「ファン・ホッホの生涯と精神病」を書きあげた。この勞作は幸に認められて、著者としては満足したが、それをきつかけに文筆の方は意外の方面へひつぱられて行つた。最初の隨筆集を出す時、題に困つて壽岳文章兄にたのんだら、「思はぬ收穫」はどうだといつてきた。

私の藝術病理學に専心しようといふ氣持は、今も變らない。しかし、それ以外の仕事も無意味だとは思つてゐない。私の書くものは、所詮私にかへるのだ。醫者が本職で文筆が餘技と思はれやうが、文筆が本職で醫者の方がついたり云はれやうが、どちらでもよい。私は生きる限り、自分の力の及ぶ限りの仕事をしてゆくつもりだ。私はもう二重生活、三重生活に慣れてしまつた。この生活は、急に改められさうもない。恐らく死ぬまで續くに違ひな

書きすぎる、とよく悪口を云はれる。身體をこわすな、と温い注意もうける。しかし、人間の生涯には燃える時があるものだ。私はいま燃えてゐるのかもしれない。自分でさう無理してゐるとは思へない。そして私は決して自惚れてはゐない。自分の書いたものは、恥しく読み返せないことが多い。五十までは勉強だ、あと十年、ぐんぐん書いて行つたら何か残る仕事が出来るかしれぬ、と思つてゐる。

この本に集めたものは、みな依頼をうけて書いたものだけである。校正しながら、その當時を思ひ出した。多忙の中に走り書きしたものもあるが、相當調べて書いたものもある。今までのどの本よりも薄い、愛着がある。一冊もうらないで、みんな私が買ひしめ、友人に配つたり、病院の玄關に置いて好きな人に持つて行つて貰ひたい氣がする。内容に自信があるといふ意味ではない、この頃書きおろしの本がつゞいたのに、この本は切抜帳から静養室の患者達が清書してくれ、いつの間にか出来てしまつたからである。——ここまで書いたら、速達がきた。玄關の看護婦達が疲れて眠つてゐて、誰も起きない。私が出かけて行つて受取つた。深夜の森の中の坂道をふう／＼云ひながら、配達夫が入つてきた。お禮にチェリ

ーを一箱やつたら、「これより先生の本を一冊貰ひたいなあ」といふ。よしよしと、書齋へ戻つて手近のものを與へた。丁度こんな序文を書いてゐた所なので、暗合したやうでをかしくつてならない。「けふは電報二通、速達四通ですよ、忙しい先生だなあ」と彼は笑ひながら、チェリーに火をつけ、禮を云つて坂道へ自轉車を引いていつた。この特別區域の丘の上の病院へ、夜中に来るのは大變である。私はベルリンの下宿で、郵便配達に煙草をチップ代りにやつた習慣を思ひ出し、この頃時々かうして犒ふことにしてゐる。

小野松二氏よ、序文などつけないつもりでゐたのに、こんな妙なものを書いて終つたのです。初めにつけられなかつたら、「あとがき」にして下さい。

十一月十八日夜半

國府臺病院にて

式場隆三郎

序 三

福助の精神鑑定 一〇

打診の材料——血にまつはる噂——川村藤雄——女形福助——男衆といふもの——家出の動機——逃避行——同性愛とは——福助の場合——青春の感傷

毛髪と壽命 二六

映畫をみる人の顔 三二

醫神とヴィナス 三八

醫神を拜む心——音樂治療——美的病院

政治狂の心理 四六

バストゥールと醫學 五一

斷種法の行手 六八

音樂と神經病 七三

751



毛髮と壽命

陶器と精神分析 八一

蒐集狂の犯罪 八五

我國の藏書醫家 九二

入澤達吉博士——富士川游博士——藤浪剛一博士——森鷗外博士——大槻如電翁其他

精神異常と不良學生 一〇二

情死と殺人 一〇八

原因と方法の變遷——最も多い喫茶ガールの死——四つの動機

文化と流行藥 一一七

ある病的著作の話 一二三

精神異常者の文章 一二八

狂の文字——文章の生理學——精神病者の文章——變質者の文章

福助の精神鑑定

打診の材料

かつてターキー、宇野千代、ヘレン・ケラーなどの女性を私に分析させた「日本評論」の編集部は、最近世間を騒がした若き女形福助の鑑定を依頼してきた。レヴェウをみたことのない私が、ターキーの打診をしたのも變なものだったが、近來歌舞伎に興味がなく舞臺をみたこともない私が福助を分析するのもかきな話である。しかし、折よく他の用で劇作家や松竹の人々その他に逢ふ機會が恵まれた。私は福助を幼時から親しく知つてゐる人にも逢ひ、新聞記事以上に詳細で信すべき資料を得た。

編集部や讀者は、精神病醫である私がエログロ趣味だと思ひ、彼の同性愛を無殘に暴露するだらうと期待するかもしれない。だが私の調査と診断は、豫想とはかなり違つたものになるだらう。私は科學者らしく冷靜に立場を守るが、人間福助の温かさをも活かしてやりたい。この一文はジャーナリズムの興味的記述にひき廻された讀者の心を鎮め、福助の更生に役立てたいとの念願によつて書かれる。

血にまつはる噂

六代目福助は、歌右衛門の養子であり先代福助の弟子であることは、世間衆知のことである。しかし、實際は先代福助とある女との間にできた子であるといふ噂が傳へられてゐる。若くて美しい福助の身に過ちのないようにとの歌右衛門の心づくしは、醜い年上の女をつけて育てさせたが、その間に子供ができてしまつた。それが今の福助であるといふ。いや歌右衛門の隠し子なのだともいふ。このやうな噂が彼をめぐつてゐることが、今度の家出にどんな關係があつたかは知るによしない。しかし、日頃多感な福助に、笑殺する力や反撥力が乏しかつたらうとは想像される。

文化が進み、社會制度に新しい光が照つても、傳統を尊ぶ歌舞伎の世界はわれわれの考へ及ばぬものがあるかも知れない。それが幾多の謎を藏するやうにみせ、噂を生むのである。家系の詮

議が、昔ほどやかましくなくなつた現代の社會でも、芝居道だけはまだまだ抜け切れない因習があるのだらう。若手歌舞伎役者の獨立旗擧げも、さうした血統への反逆の現はれのひとつとみられる。

梨園の大御所として君臨する歌右衛門に、噂が湧き傳説さへも形成されるのは當然のことである。福助の血にまつはる噂も、その一つと云へよう。彼が歌右衛門の養子でありながら、何故中村と云はずに川村といふのか。これは幼い福助自身にとつても大きな謎だつた。

小學校へ入學した時、先生が川村とよんだことを不思議に思つて歸つた彼に、近親のものは中村の間違だと教へたといふ。しかし、その間違はいつになつても訂正されなかつた。それが間違でないことの解つたのは、もつと大きくなつてからである。

川村 藤雄

福助は今年二十二歳で、戸籍名は川村藤雄とよばれる。彼はアメリカのロスアンゼルスの小學校の教師である佐藤某の子供だつた。當時歌右衛門の家では、先代福助が養子になつてゐるが、たま子夫人はもう一人ほしいと云つてゐた。それをきいた歌十郎の妻女が、アメリカへ歸る前に子供をよそへやらうとしてゐる佐藤某のあることを知つて、世話したのであつた。そしてたま子夫人の實家川村虎吉氏の戸籍に入れて、歌右衛門が引取つたのである。赤ん坊の時、股關節の脱臼があつたのを知らずにゐて、何時までも立てずにゐたが醫療で治したといふ挿話が残つてゐる。

舞臺に立つたのは七歳の時だつた、小學校を終へると家庭教師をつけて、家で教育された。少年時代の彼は、何ら變つた所もなく、普通の男の子だつたといふ。つまり兒太郎時代の藤雄は、名門の家に育つた平凡な少年にすぎなかつた。

女形 福助

昭和八年十一月、亡き福助のあとを襲つて六世福助となつた藤雄は、女形としての特色を發揮してきた。その舞臺上の演技はいふまでもないが、私生活でも内氣でやさしく、女形としては典型的な性格を示してきた。彼の趣味は俳句、刺繡、生花などである。女形としての教養のために刺繡、裁縫、生花などをやつたのであらうが、彼の性格もさうした女らしいものを好んだのであつた。

彼の舞臺顔は、先代福助に瓜二つと云はれてゐる。この酷似が彼を福助の子供だといふ噂を生ました一因であらう。しかし、それはカツラのせいもあるのださうだ。カツラはその家々によつて額のクリその他に特有な型があるもので、中村家型のカツラを用ひることによつて、先代と今の福助との相似が生れるのだと説かれてゐる。だが、さうしたカツラの形だけのために彼が似たのでない。永年先代福助と共にした生活と、そのあとを襲ふことを豫定されてゐた藤雄はいつとはなしに影響が心身に泌みこんだとも云へよう。彼が先代に似たのは、カツラとこの影響の二つによるものだと言解すべきである。

福助は生來女性的の男ではなかつた。彼には俳優としての血は流れてゐない。それが歌右衛門の家に養はれて、女形を職業とするやうになつてから段々女性的な男になつたのである。彼は一般の男性よりは女性に興味がなく、女遊びなどは殆どしなかつたときくが、それをもつて直ちに變性男子といふことはできない。彼の身體を診察したことはないが、寫真などから察しても典型的な變性はみられない。女形としての訓練が、女性的性格や體格をつくつたといふ程度と思はれる。

昔の女形の教育には、日常生活にも女らしさを強ひ、内股に歩く習慣をつけるために紙を兩膝の間に挟まして歩かせたなどといふ話をきく。福助がどの程度の女形訓練をやつたかは知らないが、それほど極端なものではなかつたらしい。彼のやさしい動作や、内氣な性情は女性との浮いた噂がなく、同性愛に耽つてゐるのではないかなど云はれてゐた。しかし、誰もさうした確證を握つてゐるものはない。

男衆といふもの

男衆といふのは、今も残る歌舞伎の傳統の一つの特色であらう。樂屋は女人禁制であるから、役者の食事、化粧、金銭の出入れ、送り迎へなど一切の世話をして女房のやうな役をするのが男衆である。多くは老練な年寄だときくが、福助についた宮澤博は二十六の若い男衆だつた。彼はもと河合武雄の男衆をしたことがあり、淺草の箱屋の息子だといふ。

女性的な男で、福助には氣に入られてゐた。今まで歌右衛門の男衆が福助についてゐたが、四ヶ月前に初めて彼が專屬として傭はれてきたのであつた。この最初の男衆に、福助が目をかけてやつたことが、思はぬ事件を起す一因となつたのは事實であらう。

北海道の宿屋で、新聞社が撮つた福助と宮澤のならんでゐる寫眞をみると、宮澤は眼鏡をかけ

た角ばつた顔である。ある新聞は宮澤がかへつて主人然と振舞つてゐたとも書いてゐる。しかし、私の調査したところでは、彼もまた福助に似た女性的な男である。顔や体格はどうか知らないが、その性情は決して男らしいものではない。宮澤を男性タイプ、福助を女性タイプとして、その二人の間に濃厚な同性愛が進んでゐたやうにみるのは、少しく誇張した想像であり、事實と相違すると思ふ。

家出の動機

福助が最初の専屬男衆である宮澤にやさしく對してゐたことは、弟子達その他に變な想像や妬嫉を湧かせたらしい。中村家へ宮澤に關するいろ／＼な讒訴が傳へられて、福助を憂鬱にしたと考へられる。

その時、折も折、福助は四月の新宿第一劇場の鏡山の狂言に出演した。その劇に尾上に扮して出た福助は、自分と宮澤との立場を沁沁と考へた。青春の感傷が彼を現實の悲劇の主人公のやうに想はしめた。名門に育ち、今を時めく女形としての華やかさが、一層彼を憂鬱にしたであらう。多感な青春の血が、現實の峻烈さに堪へかねるやうに思はれてきた。宮澤に對する周囲の空気が、悪ければ悪いほど、彼をいたはりかばつてやりたい氣持を強めた。

厭世的といふほど強いものではないが、何か現實から離れてみたいやうな、夢を楽しむやうな感傷が彼の心を捉へた。先代福助の未亡人との不和などが、原因のやうにも傳へられてゐる。しかし、若いといつても二十歳を越した彼には、自分の生立ち位は知つてゐた筈だ。嫂や甥と自分の立場もわかつてゐたであらう。生みの親を戀ふ心が皆無だつたとは云へない。しかし、生れ落ちるとすぐ別れた親である。親を恨む氣もなかつたらうし、愛情に動かされることはなかつたらうと想像される。臉の母などいふ感傷が、今度の家出にどれだけ關係あるかは疑問である。それよりも、漸く世間を知り始めた彼は、最初の男衆への醜い鞭が自分の身にあてられるやうに感じたのではないか。

もし世間で噂をしてゐるやうな深い動機があるならば、あゝ簡単に戻られはしまい。ふらふらと出て行つた彼は、出迎の人とすぐ歸つて來た。家出とよぶには、あまりに準備のない、弱い態度である。むしろすぐ歸れる準備をして置いたとも云へる。

思春期頃の青年男女が、大した原因なしに家を出て行くやうに、彼もまた軽い現實逃避を求めて行つたのだ。

逃 避 行

四月二十五日に第一劇場は楽になつた。彼は宮澤と相談して廿七日に無断で旅へ出た。行先は曾遊の地、十和田湖であつた。廿八日に東京で出した二三日旅してくるとの手紙を受取つた中村家では、歌右衛門に知らせることをはゞかつて握りつぶしてゐた。歌右衛門が別荘へゆけば、その留守中に歸ることになるので知られずすむと思つた。ところが折悪しく招宴が開かれることになり、無断旅行がばれて終つた。

ひそかに頼んだ捜索が新聞社の耳に入り、失踪事件として社會面を賑はすことになつた。それを旅先で知つた福助達は、軽い意味でやつた宿帳の偽名が、警察の咎めを受けるだらうと恐怖した。

うるさい社會から離れて、せめて數日でも靜かに、のびのびと過してみようと出かけた旅行が、思はぬ大事件になつた。彼等は初めて自分達の社會的地位を反省し、現實の恐しさに戦慄した。遊び呆けて時を忘れ、歸るに歸れなくなつた子供のやうな氣持が、その時の彼等にもあつただらうと想像される。

廿九日に新聞をみた時、すぐ家へ電報でも打つて終へば、事件は案外簡単に片づいたかも知れない。しかし、彼等は追はれるもののやうな恐怖を感じた。逃げるやうにして向つたのは懐れてゐた北海道である。今年の正月、越境事件で天下を騒がした岡田嘉子のことがその時の彼等の頭に浮んだかどうかは知らないが、落ち行く先はオーロラに近い北の國である。こゝにも若い福助の感傷の方向がみられる。

北海道の行先々で、役者であることに氣づかれた福助は、自由に憬れてきた國も、東京と變りないと知つたであらう。描き眉を落してゐる所をボーイにみつげられて、はつとして滞在をあきらめて宿を出て行つたといふ記事は、彼の弱い性情を物語つてゐる。

これと云つて、悪いことをした覺えはない。歸れば歸れるのである。しかしこゝまで來て終つたら、たゞでは歸れない。それに新聞社の通信網が、十重二十重に自分を圍んでゐる。その網は日に日に狭くなつてゆくだらう。やがて引つかかるのだ。さう考へた時、福助の弱い心臓は縮んだに違ひない。

捕まりたくない、新聞記者も怖い、警察の手も恐しい。誰か温かい手で自分を捕へてくれな
いか？と考へはしなかつたらうか。

死ぬ氣はなかつた。若し彼等が死ぬつもりだつたら、十和田湖で新聞をみた時に決行してゐただらう。また同性愛が事實だつたら、あのやうに書いたた新聞記事に刺し殺されたであらう。しかるに彼等は、平然として生きてゐた。そして所詮はつかまるものと觀念しつゝ、北へ北へと逃げてゐた。「話せばわかる」といふ安心があつたのではないか。世間の鞭は冷くても、家へ歸つて詫びれば事情はわかつて貰へる。そんな破廉恥な道行ではないのだ、といふ氣持が強かつたらう。

駒ヶ嶽の麓の宿で、たうとう發見された時の態度は、あれだけ世間の耳目を聳動した人間の態度としては、あまりにもしやあく／＼してゐる。もし彼等にやましいことがあつたとすれば、もつと眞劍に逃げ廻るか、恥しさに顔を被つたに違ひない。しかるに、彼等は捕へられてほつとしたやうな態度をみせてゐる。迎への人々に、待つてゐましたといふやうな感謝の涙を示した。隠れん坊をした子供が、逃げかくれながらも、早く見つけられるのを待つやうな氣持に似てゐる。

新聞記者達との會見の模様も、まだ若い福助が巧妙に逃げを張つてゐるとはうけとれない。

「なんでもないのです。たゞ休養に來たのです。四日までには東京へ歸つて、五月の芝居に出ます」

「宮澤との仲は、友情以上の何ものでもないのです」

と繰返してゐるが、老練の政治家などのやうな巧妙な逃げがなく、素直に答へてゐると判斷される。もし彼にもつと複雑な心理がひそんでゐたならば、新聞記者にも感づかれ、尻尾もつかまれたに相違ない。あの會見記だけ信用するのではないが、その後も何等の確證があがつてゐない所をみると、世間の噂が臆測にすぎなかつたと云はねばならない。

同性愛とは

同性愛とよばれるものは、二つある。一つは眞性同性愛で、一つは似而非同性愛である。同性愛と云へば、みんな變態のやうに思ふが、その輕度のもは誰にもある。殊に若い頃には、みな同性愛の傾向をもつてゐる。青年時代の同性愛は、やむを得ずさうなつてゐることがある。異性に慣れる前提として同性を愛する場合も多いし、異性に接する機會がないので、代償的に同性を愛してゐることもある。

だから、同性の中にある異性的なものにひかれてゐることが多い。ターキー・ファンは、必しも皆同性愛ではない。彼女等はターキーを通して男性に慣れてゐるのである。長谷川一夫のファ

ンになることは、親や友人の前をはゞかるが、ターキーや蘆原や小夜に熱中しても、さうかれこれ云はれない。かうした代償的同性愛、安全辨的な同性愛は、實は偽の同性愛なのである。

男の方でも同様であるが、男はこれほど気がねしなくてもよいし年頃になつて異性に慣れたり女を知らない、かへつて恥のやうに考へられることがある。だから男で似而非同性愛のやうな傾向をもつ者は、比較的少いのである。

このやうな男女の似而非同性愛は、年をとると消えて終ふものである。青年時代に少しもかういふ傾向のない方が珍しい。

しかし、眞性の同性愛は、青春前期のノルマルな同性愛が、年と共に消失しないで却つて強くなる。似而非同性愛は、多くプラトニック・ラブに終り、それ以上に進展することは稀である。

眞の同性愛は、プラトニックのものでもないではないが、身體的のことにまで發展し易いものである。眞の同性愛は、變質者や精神病者に多い。

さういふ場合には、同性愛ばかりでなく、他にも病的症狀がみられるものである。そして對手として選ばれるものは、異性的特徴をもつてゐる。精神的のことは勿論、身體的にもさうした特徴をもつものを好む。眞性同性愛が成立するためには、コンビが必要である。一方だけが病的で

は成立しない。一方が男性型ならば、一方が女性型である上に、眞の異性と違つた變性な形態をもつ場合が多い。病的性愛は、相手があつて初めて強化され、完成するものである。

福助の場合

福助が女性的性格者であることは否定できない。それが彼を名女形たらしめる一つの原因でもあらう。しかし、彼の女性的といふ程度は、病的とは斷定できない。芝居道では、男らしくない男をぐにやといふさうだが、ぐにや、必しも變態ではない。殊にそれが女形であつた場合は、さまざま咎めだてしないでよからう。

福助は果してぐにやだつたかをんにや(私の新造語)だつたか知らないが、宮澤は少しぐにやだつたらしい。同性愛が確立するためには、一方が異性的であることが必要だ。福助の場合は、可愛がつたと云はれる宮澤が男らしくないことは、眞性の同性愛でないといふ斷定が下される。

もとより、二人はやさしい性情で、理解し同情しあつてゐたであらうから、軽い意味での同性愛と云へないこともなからう。しかし、それ位を同性愛とよぶなら、同性愛はいくらでもあることとなる。私の調査した限りでは、二人の間には眞性同性愛といふ診斷を下すべき何ものもな

5。
歌舞伎役者を、特別な人種のやうに考へたり、過去に變質者があつたことを頭に置いてみると、今度の事件は變態道行のやうに思へるだらう。しかし、これは曾て大阪にあつたあの女形の變態殺人などは、まるで違つた淡いものとしか思へない。

青春の感傷

福助が歌右衛門の實子でないことを知つたのは、小學校時代だつた。名門を傷けまいとする彼の自肅と、歌右衛門の堅い家風は、彼の甘へた若さを殺したかもしれない。普通ならば、もつと甘へたり呑氣に暮らせる青春時代を、彼は謹嚴に生きねばならない窮屈さを感じはしなかつたか。

さうして外見、從順に、溫良に育ちつゝあるやうにみえた福助にも、束縛から解放されたい意欲と若い血はあつたらう。その抑へてゐた熱情が、初めてつけられた男衆によつて、はけ口を得た。

燃え易いが、忽ち憂鬱の海に沈むのが、青年の特徴である。福助の感傷は、強く燃えあがらずに、弱々しく逃避に流れて行つた。小説を愛讀する青年は、とかく自分をその主人公として空想し、感傷の涙をそゞぐものだ。福助は鏡山の舞臺に立つて、自分が現實の悲劇の主人公のやうな氣持になつた。

相手に選ばれたのは、男衆の官澤である。彼が弱く、周圍のものから非難されゝばされるほど、彼が可哀さうになる。そこで彼等は、曾てない無斷旅行にのぼつた。強い決心も必要だつたらうが、感傷にまけたふらふらした氣持が、それ以上に強かつたのでないか。しかも、福助は、自分が考へてゐた以上に注目されてゐる女形だつた。騒ぎが大きくなり、反省に胸が痛む時は、もうどうにもならなくなつてゐた。

今度の事件が、變態愛情の結果でなく、ケレンや芝居氣の現はれでないことは明かである。歌右衛門は嚴格だつたが、世間の眼はもつと皮肉で峻烈だつた。それを彼は知つたであらう。

彼は自分が病的人でなく、歌舞伎の傳統を守るべき責任ある女形であることを自覺し、藝道に精進して、福助の名を立派に守る心構をもたねばならない。(日本評論)

毛髪と壽命

二六

床屋の椅子の上に私は仰向にねてゐた。顔を剃りながら主人がいふ。

「先生は安眠法とかいふ本を出しましたね。床屋極樂のことは書いてありますか？」

「いろいろ調べたが、床屋へききにくるのは忘れてゐたよ。それはどんな安眠法かね？」

「剃刀が催眠劑の代りになるんですよ。顔を剃つて貰ふと、いゝ氣持になつて眠るといふんですよ」

「あゝさうか、床屋極樂とは、巧いことをいつたものだね」

と私は笑つた。あの研ぎすました剃刀が、顔や頸の大切なところにあてられてゐる。一寸手が狂つたら大變なことになる。それを知つてゐながら、白刃の下に眠るのだ。たしかに、床屋に與へられた絶對信頼による安眠で極樂ともいへよう。主人の語るところによると、初めの客は、なかなか眠らないさうだ。段々なれてくると、居眠りを始める。何年も通つてゐる中には舐をたて

る……といふ経過をとるものだといふ。人によつては眠らないが、眠る癖がつくと必ず眠るらしい。これは床屋を信頼する安心にもよるが、一つは皮膚の刺激が眠りを誘ふのである。催眠術の時に、手や頭髪をさすつたりするが、あの軽い刺激が快い眠りに導くと同じ理由である。床屋は話好きなのである。客をみていろいろと話しかける。それを嫌つて、啞者の床屋を探して歩いた人があつた。私は床屋極樂をきつかけにして、まだ話したいらしい主人と絶縁して、毛髪に關する空想に耽つて行つた。

自分の年齢をとつたことを自覺させるものは、いろいろある。その中でも毛髪は最初に起る變化の一つである。殊に四十を越したところに、白髪が目立つたり、頭髪が薄くなつたのを知るのは佗しいものだ。三十代に若白髪を妻が抜いてゐる情景は、圓滿な家庭風景として微笑ましいものである。しかし、四十代、五十代になつてどんどん殖えてきては、抜き切れない。白髪が多くなると、こんどは黒い毛を抜くものだといふ。白髪の氣になるのは、初老期の一時的現象である。澤山になれば、いつそ眞白になつてくれと思ふらしい。昔から、「老いて白髪のない者は、悪人の相である」などいつたのは、白髪の老年期を慰める言葉だつたのだらう。頭髪と壽命についても、迷信や俗説が多い。しかし、醫學的にいへば壽命との關係はそんなに密接なものでない。頭

二七

髪による壽命の判定は、できるものではない。頭髮が一本もなくなつても、元氣潑瀾としてゐる人もあるし、白髮童顔の健康な老人も多い。頭髮が白くなつたり抜けると、脳まで老衰したと思ひこむものだ。しかし、脳は頭髮の老衰よりも、ずつとおくれるものである。

正月は自分の年齢を反省する時だ。鏡を前にして、まづ見入るのは顔の皺と頭髮である。それは男ばかりでなく、女でも同様であらう。女は男より頭の技巧が多いから年齢による變化は少いやうに思はれる。だが、女の方がかへつて沁々と感じるのではないか。髪を梳き髪を結ぶ時間の長い女たちは、そゞろに若いころの長くて豊富だつた手ざはりを想ひだすだらう。

先夜私は中學の同窓會に出た。二十幾年振りか逢ふ友達は、みんな頭髮を目やすにして、「老けたなあ」とか「まだ若いなあ」とか笑ひ合つた。中に一人海軍中佐の友人がゐた。その友が最も毛が薄くなり、殆ど禿げかけてゐた。彼の軍人らしい活氣が、一層その薄い頭髮を痛ましく印象づけた。軍帽が早く禿げさせるのか、海上の潮風が毒なのかといろいろな質問がでた。すると彼は、笑ひながら語つた。

「いや、いや、俺の禿げたのは生命がけの難事に逢つたからだ。君たち陸にゐるものが、夢にも想像しない恐ろしいことが、俺の頭髮をむしりとつたのだ。俺は生命と青春を取りかへつこしたんだ」

彼は三十位の若い盛りに、軍艦に乗つてゐる時に近海で坐礁した。岩の多い海岸で、風浪は荒かつた。さしもの軍艦も三つに折れて、大部分は沈んで終つた。残る一舷の破片につかまつて、艦長を守りながら首脳部の士官たちが三、四十人泳いでゐる。その中に私の友人もゐた。

「まる二晝夜、泳ぎつゞけたよ。あゝいふ耐久力の必要な時は、日ごろの酒豪は眞先に駄目になるね」

と友はいふ。それにあせつて磯に泳ぎつかうとした人々は、岩に頭や胸を打碎かれて沈んで行つた。今は浪が鎮まつて救助船が近づけるのを待つよりほかはない。それまで心臓がもちこたへてくれよばいよのだ。

やがて救助された友は、宿について風呂に入つた。海面に浮んでゐた石炭の屑で、首から上は眞黒だつた。頭を洗ふと毛髪がぼそぼそ抜けてきた。流れてゆく毛を淋しく眺めながら、友は「あゝ、俺は助かつたんだ。たとへ一本も毛がなくなつても、この悦びの前には何でもない！」と自ら慰めたさうだ。それから一週間、海中でのだんだ水のために、眞黒の糞がでたといふ。

世には毛深いために悩んでゐる人も少くない。男でも髯の立派なのは自慢になるが、手の甲や

胸毛の濃いのは、何だか野蠻な印象を與へる。まして女では、頭髮以外の過剰な濃さは、氣になるものらしい。私は西洋の中年以上の女で、薄い髯の生えたのを時々見た。有名な婦人の肖像畫などで、極端な寫實的描方のために、髯まで表はしたのも珍しくない。現代美容術の脱毛は、裸體美をみせるために用ひられてゐるのだらう。化學の方からいへば、脱毛剤をつくることはさして困難ではないらしいが、皮膚を損めず濃い毛まで磨り切めることは困難である。石鹼を塗るやうな、手輕な脱毛剤ができれば男女共に助かるかもしれない。しかし床屋極樂は、まだまだ續くとみねばならないから床屋は安心してよからう。

脱毛剤の完成より、もつと遅れると思はれるのは發毛剤である。脱毛を希ふ人より、發毛を希ふ人の方がずつと多いに違ひない。金が出来て生活が安定すると、まづ氣になるのは頭髮の薄くなつたことだといふ。女にもてようたればかりではない。もう一度艶々した漆黒の毛がほしい。そのために高價な薬を買ひこんだり、人知れず苦心してゐる中年の男が多い。

禿や頭髮の薄くなつたことを氣にするのは、現代人の特性ではない。そのために千金を惜まぬのは昔の人とても同じだつた。舊約聖書のレピ記第十三章に、早くも禿の話がでてゐる。

「人若し、その髮毛頭よりおつるあるも禿なれば潔し。人若し、その面に近きところの頭の毛脱けおつるあるも、額の禿げたるなれば潔し」

これは癩病でない脱毛は安心せよ、といふモーゼの慰めなのである。頭髮は年齢を測る尺度になるものだが、癩病などは例外である。七、八歳の少年の頭が、六十歳の老爺にみえることがある。癩病に限らず、病氣をしたり何かの事故で脱毛した場合は、年齢をあてるに困難だ。先に述べた私の友人などは、その後風呂へ入つてゐる時など、頭だけみて上官から敬禮されるので、をかしくつて困つたさうだ。

頭髮は生れつき特徴があるものだ。濃淡ばかりでなく、刈方にもその人の個性が出る。しかし、あまり氣にすると變なことになる易い。ある文學者は、自分の次男が生れた時頭髮が薄いので、妊娠中の不攝生によるかと煩悶したと告白してゐる。これは迷信である。この類ひの迷信俗説はなかなか多い。

文化生活は頭髮にも密接な關係をもつてゐるから、無關心ではゐられない。だが必要以上に頭髮に浮身をやつしたり、苦勞するのは莫迦げてゐる。新しい年を迎へて鏡に向つた時に、動じないやうな心構へをもちたいものだ。(週刊朝日)

映畫をみる人の顔

三二

K子さんが来て、「オーケストラの少女」をみたかといふ。まだ見てゐないと答へると、友人の某夫人があれを見て、思はず大聲をあげて観客を吃驚させたと言ふ。

「ストコウスキイの顔をみた瞬間、自分が少女時代から探し求めてゐた顔にめぐり逢つた歡喜に、あたりかまはず聲を立てゝしまつたのですつて」

とK子さんは微笑する。その奥さんはいくつですかと訊けば、もう四十を越してゐるといふ。それを聞いて、私は最初憫むやうな氣持になつたが、やがて羨しくなつた。銀座の舗道や電車の中で、はつとするやうな美しい顔や、好きな顔にあつたとて、誰が聲を立てよう。映畫はそれほど夢中にしてくれる力をもつてゐる。スティルで、ちらつと横顔を覺えてゐるストコウスキイの顔をよく見たり、ダアピンの聲を聞かうと思つて、最終日の今夜私は日比谷へ行つて見た。

期待した彼の顔は、あまり感心しなかつた。あれなら江川宇禮雄が少しふけたら、大差はない。某夫人のやうに、感極まつて聲を立てる氣にもなれぬ。男としての私の魅力は、あのオーケストラを指揮する手だ。魔術師の手より、もつと恐ろしい力をもつ手だ。あれには少し參つた。古い言葉でいふと、心の金線を彼の手でかきなぶられるやうな思ひがした。

女優などでも、顔は少しも美しくないが手が魅力を持つことがある。大寫しになつた時に、顔の表情よりも手が生きてゐることである。ストコウスキイの場合などは、殊に手が演技の中心になつてゐる。女だつて、あの顔よりも、手に魅せられた人もゐるだらう。彼の手はオーケストラの樂士達を指揮してゐるばかりでなく、數知れぬ観客の感情の波を動かしてゐるのだ。あの映畫の中に、彼の音樂に聴き入る人々を描寫した場面があつた。ある特定の人物の動きをみせるためであるが、もつと多くの人々の表情をみせて貰ひたかつた。

もし暗い観客席を撮影することの出来るレンズがあつたら、その映畫がどんな影響を與へてゐるかをみるために、そつと撮つてみたら面白いだらう。試寫會に使つたら、公開前の訂正に役立つかもしれない。映畫を見てゐる人々の顔は、誰もみることができない。徳川夢聲は、時々自分の辯士時代の観客の動きを書いてゐる。しかしそれは多く聲であつて顔ではない。私はもつと微細な表情を見たい。映寫中の表情がみられなかつたら、すんだ直後の顔を見るがよい。もし細心

三三

な監督や経営者が、スクリーンのそばにゐて、明るくなつた瞬間の観客達の表情をみたら、反省すべき幾多の事實に逢ふだらう。

映畫をみてゐる人は、つくられたストーリーや、いろいろの技巧にひきずられてゐる。しかし、映畫の進展には全く關係がないことを空想したり、ある一場面にヒントを得て、自分勝手な空想に耽けることも多いものだ。私などは映畫を見てゐると、空想が刺戟されて別のことを考へ易い。殊に音楽映畫は、その曲に關聯した空想が浮んでくる。「オーケストラの少女」を見て、私にはあの中に織り込まれた音楽を始めてきいた若い頃を想ひ出して、感傷的になつた。音楽は回想的な力を持つてゐるものだ。歐洲大戰で、彈丸の炸裂によつて精神病になつて、すっかり記憶を失つて終つた兵士達の頭が、最初に恢復して來るのは昔の歌に合せる力だつたといふ。癡呆になつた人のそばで、古めかしい民謡などを弾いたり唄つたりすると、いつかそれに合はせるやうになり、やがていろいろの記憶が甦つてくるときいた。

音楽映畫のよるこばれるのは、かうした傾向があつて人々を感傷の泉に浸らせるからだ。東寶の記録映畫「上海」で最も人々を打つ場面は、兵士が野天でオルガンか何かで「露營の歌」をひいてゐるところだ。そぞろに故國を思ひ出す情緒が、あの感傷的なメロデーによつて流れ出す。泣かせる映畫をつくりたいなら、哀調を帯びた歌を入れるがよい。「オーケストラの少女」を見て、奇聲を發したのは某夫人ひとりかもしれないが、人知れず泣いたり、悲しい顔をした人はどんなに多いかしのれない。暗闇撮影機でそれらの人々の表情を撮つて、製作者に寄贈できたら面白いだらう。

映畫批評家は、スクリーンの上のことは随分詳しく、鋭く觀察してゐるが、観客の動きや表情にまで及ぶことは稀である。拙らなかつたといふ印象が、ありありと観客の顔に浮ぶこともあらう。裏切られた怒りに燃えてゐる眼が、輝いてゐることもあらう。殊に殺さなくてもいゝ人に無残な最期を遂げさせたりする時は、製作者への恨みに燃えた眼がきらきらしてゐる。さういふ眼や表情に、もつと注意すべきではないか。

例へばストコウスキイの映畫にしても、観客は早くからダアピンの素晴らしい聲に驚き、その價値を認めてゐる。彼女の生命を限りの努力を認めないのは、ストコウスキイだけである。これもか、これでもかといふダアピンの苦闘を冷然と拒絶してゐるストコウスキイに、怒れる眼が向けられないだらうか。ラストで漸く認めるので、観客はほつとして氣持よく歸路につけるのだ。歸りの電車の中で、偶然開いた夕刊にストコウスキイが三度目の夫人から冷酷を理由として、離



婚の訴訟をうけてゐるといふ記事が出てゐた、一緒につれて行つたA子さんは、「こんどはダアピンと一緒にするのかしら？」と私にきいた。「まさか！」と答へたが、何ともいへないと思つた。映畫のストーリーだけでなく、彼にはどこか冷い所があるのだらう。それが家庭人として安住出来ない原因ではないのか。彼の音楽家としての魅力は強いが、人間としての温か味は少いのかも知れぬ。少女の計劃が物にならうとしながら失敗に終る時、場内はしんとして、溜息さへも聽えさうだ。ああいふ時の表情は、芝居に欺されてゐることを忘れて、本當に悲しい顔になつてゐるだらう。

しかし、かういふ見方は私が男だからだともいへる。女なら何でもいふことをきいて呉れる男よりも、手剛い男の方に魅力があるだらう。あの映畫が女に與へる力は、美しく聲もよい少女にさへ冷然としてゐるストコウスキイに、一層男らしさと、藝術家としての高さが感じられるのかも知れない。すると女の觀客の表情は、私の空想とは反對のものになる。そんな少女を認めてくれるな、あなたにはもつと素晴らしい女がみつかる筈だと彼に味方しながら、少女を認めさうになるのははらする。或は自分のすきな男が、他の女を苦しめるのを楽しんでみてゐるやうな、一種の殘虐性に浸る心理にもなるだらう。かうしていろいろな想ひで、みるところに映畫の面白さがある。場内が暗くなつて、空想を自由に樂める上に、どんな顔をしてもどんな動作をしても恥しくないのが、映畫のよさでもある。映畫の鑑賞法は、どういふ道をとつてもよい譯だ。スクリーンに引き入れられて、我を忘れるほど夢中になるのもよい。だが、眼をそらして觀客の動きをみたり、隣の人の表情を盗み見るのも悪いことではない。巴里のムーラン・ルージュのやうに、時々天井をあけて換氣法をやりながら煙草をゆるしてくれたり、一層空想がたかまつて、映畫も面白くなるのではないか。これは煙草好きの私の儂い望みである。試寫室は感じが出ないが、煙草の喫へるのだけは楽しい。

映畫館は、もつと氣持よく見られるやうに努めてほしい。案内嬢の冷酷さは、役所以上だ。せめて百貨店位の丁寧さと、愛嬌があつてよいと思ふ。これは暗闇稼業で、親切にしたつて始まらないといふ考へからだらうか。お客も早くみたいために、あせりすぎる、しかし案内嬢も整理にだけ氣をとられないで、もつと和やかな顔をしてくれないものか。人と人との生活は、先づ顔と顔との生活だ。心の様は、しばらく経つてからわかることが多い。映畫によつて變つた顔を、一番みてゐるのは案内嬢だらう。彼女らに觀察眼があつたら、面白い話がきけると思ふ。

(映畫之友)

醫神とヴィナス

醫神を拜む心

隨筆の依頼をうけると、何でもいゝからといはれることが多いが、でも何か希望を聞かせてくれと重ねてきくと「やはり醫學隨筆だが一番有難いんですがね」と答へられる。

先月來、東日に連載されてゐる「打開け話」を読んで感じたのは、自分の病氣や身體に関するテーマが最も多いことだつた。打明けるとなると、身體のことがまづ頭に浮ぶものとみえる。

アメリカで最も賣行のいゝ本は、健康法に関するものだといふ。世界の富の半分近くをもつアメリカ人が、健康を望むのは當然の現象だとも云へよう。私も最近、健康法の醫書を出したが、その需要が多く反響の大きいのに驚いた。今まで十數冊本も出したが、こんなに毎週増刷するやうな激しい要求に逢つたことはない。これは恐らく在來の私の本の讀者とは違つた階級の人々だ

らうと思ふ。その四十を越した人々は、本の價格などは問題でないのだ。一頁でも、何行でも自分の健康に役立つ記事があれば、と思つて求めてゐるに違ひない。

インチキ宗教のはびこるのは、既成宗教の無力の爲もあらう。しかし、それよりも治療的な要素が多分に含まれてゐるので魅力があるのだ。宗教的法悦に浸りたいのではなく、健康になりたい爲に入る人の方が多いのだと思ふ。

金の無いものも、健康はほしい。

だが金のためには、健康を無視しなければならぬ場合が多い。金の出來た人は、健康が何よりほしいのだ。金で買へるなら、どんな器械でも手に入れたい。どんな薬でもんでみたい。それに比べれば、本などは安すぎる位だ。怪しげな薬に大した金を拂つて悔いない人の心理は、金のない人には想像も及ばないものがある。ホルモンは、他の薬に比べれば随分高價であるが、まだ安過ぎると嘆いてゐる人が少くない。あれが一本百圓もしたら、もつと效くだらうにと云つた人がある。

大學を出たインテリが、醫者からみたら全く無價値と斷定出来る薬に、五圓も十圓も拂つても惜まないのを見ると情なくなる。醫藥が、一日廿五錢でも高いと思はれてゐるのに、科學的經驗

に乏しいものの造つた薬が、その何十倍の高價でも大衆に魅力のあるといふ現象は、醫者も反省すべきものがあるのだと思ふ。

人間の最大弱點は、病氣だ。その弱點につけこんで不當な利得をえようとする奴は、最も憎むべきだ。どんな犯罪でも背徳でも、健康に關するインチキに比べれば、罪は軽い。吾々の生活には、何か奇蹟を待望する心理がひそんでゐる。急に偉くなる法はないか、急に金持になる道はないか、急にこの苦難から脱却する手段はないかなど。しかも、その總てを諦めても健康になりたない。この病氣を突如として脱れられる奇蹟はないかと念じてゐる。そこに食込むのが、邪教やインチキ療法だ。これを考へると、醫者は誰よりも良心的でなければならぬ、と沁々思ふ。人間が心から拜むのは、いざとなれば醫神ばかりではないかといふ氣がする。

音楽治療

最近ソヴェトで映画による治療が試みられつゝあることが報道されて興味をよんでゐる。そして「音楽では治療出来ないものか？」といふ質問が時々私にも向けられる。

人知の幼稚な時代には、病氣は悪魔が憑いたと考へ、それを退散させる手段として音楽が用ひられたことがある。ホーマーの詩にも疫病を鎮壓する爲に音楽を奏した事實が書れてゐるし、聖エスクラプスはやさしい唄で急性病を治癒したと云ふし、テオフラスは毒蛇に噛れた苦しみを音楽で和らげ、聲樂家フリネリもその唄でスペイン王の憂鬱症を治したと傳へられてゐる。

この頃ドイツから歸つた友人は、手術の時に音楽を使つてゐるのを見て來たと云つてゐた。だから音楽を治療に用ひることは、古くから行はれたことであり、最新の問題でもあるわけだ。

藝術の中で、われわれの感覺を最も強く動かすものは音楽である。音楽の力が人間の生活の重大な因子になることはいふまでもない。この大きな力を治療に應用することは、勿論意味のあることだ。積極的に音楽が嫌ひだ、といふ人があつたら病的とみねばならない。誰でもいゝ音楽を聞けば氣持がいゝ、また何等か心的影響を受けてゐる。浪花節で思想善導をやらうとした内務大臣のあつた時、インテリは大いに笑つた。併し、文部大臣の他に、藝術の爲に専念する大臣が新設されたら、まづ音楽に力を注ぐだらう。流行歌の恐しい力と、その影響とを考へるならば何よりも健全で高尚な音楽を普及させて、國民の藝術的教養を高めるべきだ。ラジオ體操がどれだけ國民の健康を向上させたか知らないが、體操をやつてもやらないでも、毎朝聞きなれた音楽を耳にするのは氣持のいゝものだ。この意味でも、ラジオ體操の音楽はもつと力を入れなければなら

ぬ。

病氣の中でも、精神病や神経病は、最も音楽治療が有効だと思ふ。これはソヴェエトの映畫治療の成績でも同様の傾向が見られる。どんな病氣の苦しみも、音楽によつて幾分は軽減するであらうが、神経的のものは一層意味がある。その音楽の種類によつて、いろいろな心的變化を受けるであらう。

併し、音楽のすべてが治療的に有効だとは考へられない。その害毒も見逃せない。例へば、日本の安直なレストランに行はれてゐる、あの躁音といひたい悪レコードは、果して食欲を害しないだらうか。電車やその他の雑音よりはましだといふ人があるかも知れぬが、あの喧噪に堪へて味覺を満足させ得る人々の心臓——いや胃腸の強さは驚くべきものだ。アメリカのある消化器病學者は、胃潰瘍の何パーセントかは悪ジャズによる胃の神経的障碍によるものだと言定した。

これは必ずしも誇張だとは、云ひ切れない。いゝ音楽による治療的效果は認められるとしても、悪い音楽による心身の害毒も否定出來ない。

自殺を誘ふやうな音楽、心中を決行させるやうな音楽のあることは屢々注意された。併し、それほど極端なものでなくても有害な音楽が澤山あると思ふ。耳を楽しませる音楽だけでなしに、心を樂しませるやうな深い音楽、人々を活々とさせるやうな音楽を聞かせてくれる天才が出て、國民がその恩恵を受けることが出來たら、文化勳章を貰ふ價值があると思ふ。醫者は音楽處方をつくり、藝術家は人間生活のための作曲をするやうになつたら、音楽の價值は更に大きくなるに違ひない。

美的病院

いつぞや、獅子文六、木々高太郎兩君と一緒に飯をたべてゐた時だつた。獅子君は箸を休めて、私に向つて云つた。

「醫學は進歩したといふが、病院はひどいですね。五燭の電燈のあの陰氣な病院で、どうして病氣が治りますか。醫者が退院しろと云つても、もう二三日置いてくれと頼みたい病院にしなければ駄目ですね」

これは醫者にとつて痛い言葉だつた。確に今の病院は、「五燭病院」だと云はれても仕方がない。電燈が暗いやうに、食餌も悪い。ホテルより高い入院料をとりながら、部屋が汚い上に、サーヴィスも悪い。しかも、堅いベッドに寝てゐるのは病人である。

健康保険が実施されて、少数の醫者以外は困つてゐる。その上に、國民保険が実施されさうだ。開業醫はこれからどうなるのだ？ といふ不安が漲つてゐる。社會情勢から云へば、醫療の合理化の實現であり、當然のことかも知れぬ。しかし、大衆は果して醫療費のみに困つてゐるだらうか？ と云ふ疑問も湧く。サラリーマンなどが、日頃洋服やら飲食費で月給を使ひ切つてゐるので、いざ病氣になつた場合に借金しなければならぬ現狀は同情に堪へない。併し、醫者の方に云はせたら、何故シネマやカフェーで使ふ金を節約して、不時の疾病に備へておかないのかと反問したい。これはさう簡單に片づけられる問題ではないだらう。だが、現代の醫者は病人が考へてゐるやうに、裕福ではない。少数の人を除いては、みんな薄給のサラリーマンと同じ状態なのだ。一度、醫者自身が病氣をしたら、家族が困るやうな餘裕のない生活だ。

病院が薄汚く、五燭をともしてゐるのは、決して醫者の美的教養が低いからばかりではない。その資力が足りないのだ。ホテルがだん／＼立派になり、レストランが美しくなるのに比べたら、病院の改築や新築は遙かに少數に過ぎない。

美的病院が實現して、いゝ音楽が聞け、いゝ繪を眺められ、いゝベッドで美しい看護婦にみとられるやうにならねば嘘だ。醫者がゐる細い注意をすべき温泉に、醫者はゐないで設備ばかり病院よりも立派なものがあるのに反して、折角醫者が居るのに、美しく、氣持のよかるべき病院が薄暗いのは大きな矛盾だ。疲れ易い現代人が、休息を求め、享樂を求めるに急な氣持はよくわかる。その時に美的病院が出來てゐて、手軽に入院出來たらどんなにいゝだらう。病氣になる一歩前に、入院して豫防すれば期間も短くすみ、費用も少なくてすむ。

美的病院は、この意味で半健康者をも收容する所でなければならぬ。まだ本當の病氣にはなつてゐないが、衰弱してゐたり、疲勞してゐて、もう少しで病氣になりさうな人も入院させて、健康にして歸す病院が出來ねばならない。それには今のやうな「五燭病院」でなく、もつと美しい、快適な病院が新設されねばならぬ。これは現在の開業醫の經濟狀態では、夢のやうな話かも知れぬ。しかし、醫者も患者も半患者も、かうした病院の出現を熱望する機運をつくれれば、決して春の夜の淡い夢に終らないと思ふ。(中外商業新報)

政治狂の心理

何々狂といふ言葉は、吾々精神病の専門家はもう使はなくなつた。現代の日本精神病學の樹立者である吳秀三博士は、何々狂をすべて何々症に訂正された。だから今の精神病學の術語には、狂といふ字はない。所が世間では、まだ狂人を初め、狂をつけた言葉が多い。これは専門的にみて、二つの解釋を下すことができる。一つは今では何々症といふべき言葉を、依然として狂とよんでゐるものと、もう一つは獨立した病氣でなく、症狀の一つに過ぎないものを、やはり一つの病氣のやうに何々狂とよんでゐるのである。

しかし、大體から云へば、何々狂といふものは、純粹な精神病的のものでなく、常人にもある癡り屋、熱中家を指すやうになつた。例へばゴルフ狂といへば、ゴルフで氣の違つた人ではない。一週に八回もゴルフにゆく人。葬式の歸りにもゆかずにゐられないやうな人をいふのだ。もつとも蒐集狂などになると、常態と病的との區別が怪しくなるやうなものもあるが。

政治狂とはどんなものか？ 誰でも知つてゐるやうで、定義を下すとすると少し難しい。一體政治といふものは、本職でやるべきものか、兼職でやるべきものか？ まづこの問題から片づけねばならない。日本の風習から云へば大臣になるのはまさか道樂と片づけられないが、議員になつたり、政治ばかりやつてゐる人を政治家と、政治屋に分ける。この區別も實は曖昧なものだ。どの位ひからが政治家で、どこからが政治屋だか判らない。

しかし、あまり有力な地位にもつせず、大した政治的意見もないのに、たゞ政治が好きで日夜、政界を駆けめぐつてゐるやうな人を、やゝ輕蔑して政治屋といふやうだ。目的が金權漁りとはつきりしてゐるものも、やはりこの部類に屬するだらう。政治ゴロは、政治屋の下にくつついてゐる寄生蟲だらう。

所が、他に定職があつて、その餘暇に政治的な活動をしてゐる人がある。かういふ人は初めは餘暇にやつてゐるので、社會奉仕的な、或は犠牲的な立派な人のやうに見えるが、いつの間にか本職を投げすて、政治に没頭して終ふ。政治といふよりも政治的運動——もつとさがれば選舉運動だけに夢中になる。かういふ人を政治狂とも云へるだらう。

狂といふ概念は、必要以上に熱心なことを指してゐる。産を破り、家業を捨て、政治に没頭し

ても、それが真に意義あるならば狂とは云へない。しかし、深い信念もなく、實力もない人が、徒らに政治に夢中になるのは、家庭的にも不幸であるし、社会的にも意味がない。ある場合には正しい政治を害することがあつて、政治狂といふよりも、政治悪と稱ばねばならない。

だが世間には、こんな罪の深い政治狂でなく、軽い熱中家がある。これはスポーツ狂や將棋狂と同格で、憎むには當らないと思ふ。政治が本職でなければならぬものか、兼職でもいゝものかは、簡単に決められないだらう。世間でいふ政治狂とは、他に職業をもちながら、政治に熱狂する人をいふのだ。

それでは、政治狂が昂じて本當の精神病になるものはないか。精神病の原因は、複雑多岐のもので、一つや二つの原因だけで起るものは稀である。政治だけに熱中したために、精神病が起るとは考へられない。たとへそのやうに見えても、それは眞の原因ではなく誘因とみるべき場合が多い。反對に、精神病が始まつてゐるのを自分も、世間も知らないでゐて、そのために必要以上に政治に深入りすることがある。つまり政治狂が原因でなく、結果になるのだ。どうせ、さういふ人は政治にも失敗するにきまつてゐるから、世間では「政治に失敗して發狂した」と噂をするだらうが、實は發狂してゐたので政治家としても成功しなかつたのである。

また、精神病の症狀として政治的の妄想が現はれることがある。誇大妄想は、麻痺性癡呆と躁病と精神分裂症中の妄想性癡呆に最も發症しやすいものである。自分が偉大な政治家になつたやうな氣がしたり、大した手腕をもつたやうに妄信して、公衆の前で演説をするとか、政治的文書をかいたりする。死んだ松澤病院の名物男蘆原將軍も、この政治的妄想をもつてゐた。私も彼の内閣組織の辭令をもつてゐる。

明治時代には、若い人間でも政治的活動ができたし、その手腕によつては一躍相當の位置につけたであらう。今ならば病的な妄想としか考へられないやうな、野望に燃えてゐた青年が多かつたに違ひない。しかし、これが段々制度の完成その他の事情のために、無名な青年が出る餘地がなくなつて終つた。大正時代はその最も極端な時勢ではなかつたらうか。

それが昭和になつて、元老や老政治家の數も減り、内外の社會情勢が「昭和維新」などいふ言葉を叫ばせるやうになつた。政治家の質が低下したと云ふ聲がする。しかし、これは政治家ばかりでなく、あらゆる方面でも云はれてきた。大臣でも博士でも、昔は大したものだつたが今では思はぬ人がなれるではないか、ともいふ。が、これは必しも低下と云へないだらう。文化が進み、教育が普及すれば、昔のやうな天才偉人英傑時代が去つて、今のやうにやゝ平均した時代が来る

のは必然的な現象とも考へられる。

そこで明治時代とは違つた意味で、意外な人物が突如として色々な檜舞臺に登場し得るやうになつた。今の青年が政治に興味をもたな過ぎる、とはよくきく言葉である。しかし、今の青年は政治に無智なのではない。彼等は他にも關心をもつものが多すぎるから、政治的關心が稀薄に見えるのだと思ふ。

たと政治がスポーツのやうに明朗でなく、フライン・プレーが少ないので、彼等を魅了する力が足りないのである。私は政治を毒するやうな悪性のもや、眞の病的な政治狂は排除すべきであると思ふが、ファンといふやうな意味での政治狂は、もつと殖やすべきだと主張したい。さういふファンの中から、案外立派な政治家がでるかも知れない。(政界往來)

パストウールと醫學

はしがき

近代科學の歴史に、不朽の大きな足跡を残したルイ・パストウールは、一八二二年十二月二十七日金曜日の明け方、フランスのドールの町の「薄暗い家の小さな部屋」で生れた。それから一八九五年九月二十八日、多くの門弟の人々に取かこまれて靜かに息をひきとるまでの生涯は、輝しい科學及び科學精神のための戦ひに終始した。

試みに左に、彼がなしたげた業績の一部を書き誌しておかう。

乳酸醱酵及び酒精醱酵の研究 (一八五八年)

自然發生論に關する研究 (一八六二年より)

葡萄酒腐敗の原因の發見 (一八六三年)

蠶の疾病の病原體の發見 (一八六五年)

麥酒内の微生物の發見 (一八七一年)

特種傳染病原體の發見 (一八七七年)

炭疽病の研究 (一八七七年)

狂犬病の研究 (一八八五年)

研究は専門としてゐた化學のみではなく、その後半生は醫學のために捧げられたといつていゝ。特に當時種々な特權をもつて、のさばりかへつてゐた古い非科學的な醫師仲間との長い執拗な戦ひは、驚嘆すべきものがある。まことにルー博士の言をひくまでもなく、パストウールはその頭腦が偉大であつたばかりでなく、精神的な力によつて、どれだけ大きな影響を残してゐるかわからない。フランス本國では彼の生涯を劇化して上演し、今日もなほ人々を感動せしめてゐるし、わが國でも最近「科學者の道」といふ彼の傳記映畫が上映されて、一般の好評を博した事實を見ても、それがわかるのである。

私はここに、パストウール傳として最も優れたものと認められてゐるルネ・ヴァレリイ・ラドの「パストウールの一生」に據つて、彼の生涯の一時期を紹介してみたいと思ふ。

—

かの有名な自然發生論に關する論争がさかんな頃の或る日、パストウールの研究こそは「今世紀の榮光であり、來るべき世代への救ひである」といつてゐた醫師デクラが、微生物について一場の講演を行つた。彼は當時まだ一般の學者に信じられてゐなかつたパストウールの説を引用し、そこから種々の歸納を試みて、聽衆の一部に大きな感動を與へた。講演が終つた後、デクラ自身も名を聞いてゐただけでまだ一度も會つたことのないパストウールが、彼の方へ歩みよつて來て、一通りの挨拶をすませると直ぐ、彼の説に對する批評をした。デクラはその日の出來榮えから考へて、パストウールも喜んでくれるのだらうと豫期してゐた。しかしパストウールは、次のやうにいつただけであつた。——

「私の説を支持して下さつたあなたの議論は、非常に巧妙でしたが、嚴正さを缺いてゐたやうでしたね。あなたは色々歸納をされたが、類推は確證ではありません」

どんな小さな不明な點をも、辛抱づよい實驗的方法によつて明かにしなくてはゐられなかつたパストウールは、門弟の數を増すことにのみ汲々として、事實の解明をなほざりにする大家連中

とはまったく反対であつた。彼はアルボアの學生たちに向つて、「不屈不撓の努力と熱心な研究だけが、すべて偉大な眞實なものに近づきうるのだ」と語つてゐた。

——このやうな方法によつて、十年の間に、乳酸や酒精の醗酵を究め、葡萄酒腐敗の原因をさぐり、蠶の病氣の病原體を確め、麥酒内の微生物を發見して社會に大きな貢獻をした彼は、それらの研究の彼方に、更に別の世界を豫感してゐた。

すでに二世紀の昔、イギリスの物理學者ロバート・ボイルは醗酵と酵母の本質をつきとめたものこそ、或る種の疾病現象をも説明することが出来るであらうといつてゐた。

この言葉が、一八六三年以來ある種の傳染病と病菌について色々考へてゐたパストウールの腦裡に、甦つて來たのである。

彼は一八五九年の九月に、その長女をチフスのために失つてゐる。そのときの悲しい思ひ出は、猛烈な病菌の犠牲となつて、フランスから毎年失はれてゆく幾千幾萬の若い生命への愛惜と一緒になつて、彼を病理學の研究へ向はせることになつたのであつた。その心には、人類の悩みがあつたのだ。

それにつけても、彼は自分が醫者でないことをどんなに残念に思つたことであらう。いままでも微生物に關する研究を積み重ね、大きな貢獻をして來てゐるのだし、醫學の世界へ入つてゆくぐらゐは何でもないことのやうに思へるのだが、當時の事情はそれをやすやすとは許さなかつた。専門外の醫學について多少でも研究をすれば、人々はもう化學者とも考へず、それかといつて醫者の扱ひをしてくれるわけでもなく、他人の領地で密獵をするシミートル（——すべての生理的現象を化學的反應によつて説明しようとする臆説に災されたものこと——）などとあざけるのであつた。それほど化學者に對する醫者の不信は大きかつた。一八五五年に發行されたトルソー及びピドゥー共著の「治療學」といふ古い本の序文にある言葉が、この間の事情を雄辯に物語つてゐる。

「呼吸、消化その他等々の醫學的分野における生理現象の化學的條件を發見した化學者たちは、それらの作用及び現象の理論を作り上げたつもりである。かくの如きは永遠に一片の幻想であるが、彼は決してそれから覺めることはないのである」——また、「生理的現象と病理的現象の間には、鑛物と植物ほどの相違が存在する」、「どんなに單純な病氣を説明する力も、生理學の力にはないのである」等々。

パストウールは、科學的な醫學によつて古くさい醫師の考へを打ち破るまへに、まづかうした

世俗的な因襲を打破しなければならなかつた。——だが幸ひなことに、思ひもかけぬ提案があつて、彼の希望は一部かなへられることになつた。一八七三年のはじめに、醫學アカデミーの無所屬部に椅子が一つ空いて、彼に立候補権が與へられたのである。彼は喜んでそれをうけた。そして當選するとともに、新しい研究を備へて、ますますその實驗的研究をすすめて行つた。

醫學アカデミーの會員に選ばれることによつて、パストウールにはもう一つ別の喜びがまぢかまへてゐた。——そこにクロード・ベルナールがゐることだつた。實驗醫學の熱心な主張者で、後にはエミール・ゾラの自然主義文學に決定的な影響を與へたベルナールも、臨床家以外のものに對して反感の向けられてゐたこの環境のなかでは、しばしば他國人の思ひを味つてゐたものである。何しろその頃は、人の言葉にもあるとほり、醫學は科學界の王者であつた。……えらい醫者になると、まるで支配者のやうな氣持でゐたのである。患者に接して自分の意見を強制する習慣から、横柄な態度が生れ、身振りを交へた大袈裟な言葉には、無意味なくせに尊大きはまる金言のやうな慣用語を連發した。彼等が通れば人々はそのまへに身を屈め、どんな集りのなかでも常にふんぞり返つて威張つてゐた。「醫者つて奴はサロンや集會へやつて來る毎に、まるで、吾輩は君等を救つてやるために來たのだ、といふやうな恰好をしてるぢやありませんか」とクロード・ベルナールはパストウールにいつた。

二

それから數ヶ月の後、パストウールは科學アカデミーにおいて、麥酒の變質に關する實驗的な研究の結果を發表した。葡萄酒の場合と同様に、麥酒も決してひとりでそれ自身で變質するはずはないのである。「麥酒が變質して、酸つぱく、どろどろと、乳汁のやうに腐敗したものになるためには、麥酒のなかで何か別の違つた有機物が繁殖するのではなければならぬ」

そして、腐敗の原因は外部から入つて來るのではなく、麥酒内の微生物がその原因であることを證明し、純粹な酵母の性質や、麥酒内にも醱酵素だけが入つてゐれば完全なことなどを説明した。

彼が自分の業績の上へ新しく加へられたこの結果を見、數世紀以來あらゆる麥酒釀造業者たちの努力をあざ笑つてゐた難問題が征服出來たことを確めたときには、どんなに大きな喜びを感じたことであらう。その頃の手紙のなかに、次のやうな一節がある。

「これが判明してしまつた今となれば何でもない話なのだが、この簡單明瞭な結果をうるまで

に、私は幾度苦しい夜をすごさねばならなかつたことせう」

しかしこの努力の前途には、もつと困難な仕事が待ちかまへてゐた。——それは彼のこの説を他の學者たちに信じさせるといふことだつた。いはゆる自然發生的な「變質」の觀念は、人々の頭にこびりついて離れなかつた。パストウールにとつては單なる假説にすぎないこの考へを楯にとつて、反對者たちはなかなか譲らうとしないのである。しかも人々はこの假説によつて、間違ひだらけの事實だけをひつぱりだして來るのだからたまらない。

一八七三年、科學アカデミーで、彼はこの研究に關する講演を行つた後、次ぎのやうにつけ加へた。

「私の反對者たちがいはれるやうな『變質』の説が正しいとしたら、私がここで實驗的に證明した變化しない麥酒の作り方はありえないことになるのではないでせうか。それから、顯微鏡的な生物に關する發見と認識に基いたこの麥酒の研究は、新しい酸化についての研究の上に生れて來たものではないでせうか。更に、これらの研究は、常に微生物が自然發生的なものでないといふ發見と認識とに基いてゐるのではないでせうか。蠶の病原體とその豫防法もかくして發見されたのではなかつたでせうか。——即ち、私が十七年間没頭してゐた一切の研究は、次ぎから次ぎへ

新しい成果を生み、絶えず發展してゆきながら、實は、同じ思想と原則に據つたものではなかつたか。……研究者が眞實の道を進んでゐるといふ最もいい證據は、彼の研究の内容が常に豊富になつてゆくところにあります」

しかし、これはまた、いはば小競合ひにすぎなかつた。彼はそのときすでに來るべき大きな戦ひを豫感して、一八七三年十二月の手紙に「ああ、私は、傳染病の實驗的研究に一身を投げだしてもびくともせぬやうな健康がほしくてたまらない！」と書いてゐる。實際、醱酵の研究に深入りしたといふのも、彼にとつては、目的は遠いやうに見えても、醫學へ達する一つの道であつたのだ。麥酒の内部的變化が、そのなかで繁殖の好條件に恵まれた微生物の存在に由來するものであることを確めたとき、また、古い自然發生論的觀念と反對に病氣も自然に生れるものではなく、他の原因があることを知つたときこそ、前に述べたビドワー達の考へるやうな古い醫學が打破されるときであつた。——かくして刻々にロバート・ボイルの豫言が實現しようとしつつあつたのである。

だがそれにしても、當時の多くの學者たちは、かかるパストウールの到達點からはまだ遠いところに佇んでゐた。醫學者が化學を修めるなどといふことは、相變らず「馬鹿か氣狂沙汰」であつ

た。ただわづかに、因襲にこだはらない、眞實をもとめる少數の若い人々の間へ、パストウールの影響は深く浸みこんで行つた。

六〇

三

「針の痕は死に向つて開かれた門である」と外科醫ヴェルボーがいつたことがある。この開かれたる門は、ほんの小さな外科手術の前にも更に大きく開かれる。事實、膿瘍や瘰癧の切開口がしばしば重大な結果をひき起したので、外科醫のなかにはほんのちよつとメスを使ふにも躊躇するものがあつたぐらゐである。ところが不思議なことに、大きな外科手術の場合は、まつたく別なのである。これはまるで逆のやうに思へるが、當時の人々は、非常にむつかしい手術は簡單に成功すると信じてゐたのだ。その結果がどうであつたかは、その頃、膿血症とか壊疽とか脱疽とか丹毒とか敗血症などに罹る病人が非常に多かつたのを見ても察しられるではないか。卵巢の切開などの手術がどんな危険を招くかはいふまでもないことで、病院ではかういふ手術は行はうとしなかつた。もし不幸な結果が起つて、その責任が病院に歸せられ、世間から病院とは病毒の巢であるなどと取沙汰されることを嫌つたからである。

そのために、公共の費用で、パリの郊外の衛生地に、離れ家を一軒借入れることになつた。そして——この近所の町の人々は、病氣の婦人が十人、次ぎから次ぎへとこの離れ家へ入つて行くのを見た。が、間もなく、人々はこれらの病人が十人とも相次いで運び出されるのを見ねばならなかつた。しかも今度は棺におさめられて……。無智な人々は、この不思議な家を、「罪の家」とよんだ。

やがて醫者の方でも、自分たちが死を持ち込んだのではあるまいか、知らず識らずの間に恐るべき病毒を傳播したのではあるまいか、と疑ふやうになつた。

大體、十九世紀の初頭以來、外科は停滞どころではなく、退歩してゐた。それ以前は、被手術者の死亡率もさう多くはなかつた。何故なら、十分理由はわかつてゐなかつたにせよ、とにかく焼灼とか熱湯を用ひるとかによつて殺菌法を實行してゐたからである。しかるに、ブルーセの影響などもあつて、炎症の誤つた理論が外科を逆行させるやうなことになつた。一八六八年には、病院の數はふえたのに、死亡率は六十パーセントを越してゐた。そして醫者たちは、手術後の不幸を防止する第一の秘訣が、繃帯の改良にあるなどと信じてゐる状態であつた。

一八七〇年の戦争の期間に、負傷兵の收容されてゐる病室を通つたことのある人々、殊にその

頃醫學生だつた人々は、みんな悲惨な思ひ出を持つてゐる。それは果しない地獄の圖であつた。病人はだれもかれも化膿してゐたのだ。はげしい臭氣が、一度その病室へ入つた人々の身體にこびりついて離れなかつた。敗血症はいたるところに流行してゐた。「膿汁は、外科醫の手によつて方々へまき散らされた」と、後年醫科大學の教授になつたランドウィジイは、學生だつた當時を思ひ出して語つてゐる。

戦争の終り頃になつてから、やつとアルフォンス・ゲランが「化膿症の原因は、パストウール氏が空氣中で發見した病菌の作用にちがひない」と考へるやうになつた。

かくしてパストウールが醫學へ投げかけた光りは、ゲランの協力をまつて、徐々に輝きはじめた。一八七四年には、イギリスの有名な醫師リスターが手紙をよせて、遠くから敬意を表した。

「この機會に、貴下に對する小生の懇篤なる感謝の意を申上げることをお許し願ひたいと存じます。貴下の輝かしい御研究によつて、小生は腐菌の理論に關する眞實を教へられ、殺菌法の有
效な唯一の原則を與へられました」

パストウールは、指導に、相談に、誤つた方法の矯正に、あらんかぎりの力を盡して従事した。そして、病院をはじめ到るところで、消毒のための萬全の注意と傳染の豫防とを理解させ、

すべての醫者の頭へ、微生物の病理學的な役割をのみこませようと努力した。——そしてこれは、長くて困難な戦ひだつた。

一八七五年二月には、醫學アカデミーで腐敗菌に關する討論が始まつたが、いつまでもつづいてなかなか終らうとしなかつた。パストウールは果てしのない假説の陳べ合ひは、いい加減にきり上げたいと思つたので、次ぎのやうに斷言した。

「腐敗や化膿が、常に變質する類蛋白質によつて起されるものであるとか、或ひはあれこれと變化する半組織體に生ずる現象であるなどといふ説を、今もなほ支持してゐる人々があるのでせうか。これら一切の空想によつて作り上げられた屁理窟は、われわれの簡單にして且つ實證的な實驗によつて、跡方もなく崩されるであります」

そして最後に、次ぎのやうな提言をした。

「ここ數週間にわたる討論において、諸君は、アカデミーが如何すれば、最もよい意味でその研究、討論のなかに眞の科學的精神を打ち樹てうるか、お考へになつたことと思ひます。そこで私に一つの提案を許していただきたい。それはわれわれの間に一つの約束を結ぶことである——即ち、今後いかなることがあらうとも、この場所を演壇と呼ぶことをやめ、ここにおいてなされ

る示説を演説と稱することを禁じ、ここで發言する人々を辯士とはいはないことに決めたいと思ふのである。かかる表現はよろしく、確證を與へることの困難な問題について討論する政治的會合に委せたまへ。これらの言葉——演壇、演説、辯士——は、科學の統一、嚴正と相容れないものに考へられるからであります」

拍手が起つた。そこに集つてゐた人々も、彼らに向つていはれたこの事實を認めないわけにはゆかなかつたのである。しかし、列席者の一人であるポジヤルが、人を小馬鹿にしたやうな懷疑的な口調で發言した。

「パストウール氏の言によれば、氏は二十年以來自然發生論を研究されて、しかもまだ、その確證を發見されぬといふではありませんか。氏はこれからもひきつづいて研究されるだらうが、そして私といへどもその勇氣と堅忍と明敏は信じるものであるが、果して發見出来るか否かは、極めて疑しい。この問題は、ほとんど解決不可能なものである——。それ故に、われわれの如く、それに對して固定した意見を持たぬものは、さまざまの事實を、次ぎから次ぎへと調査し、批判し、討論する權利を保留したいと思ひます」

先刻から、世界と同じくらゐに宏大な問題をお手輕に扱はうとする態度にいらいらしてゐたパストウールは、たまりかねて叫んだ。

「私は一つの問題について二十年間没頭して來た。しかも、意見を持つてはならないのでせうか。如何にも、調査し、批判し、討論し、懷疑する權利は、事實を確證するためには何一つしようとしない人々のものである。書齋の煖爐の前におさまりかへつて、私の研究の結果を讀んでゐる人々のものである！」

「あなたが自然發生論に關して意見を持つてゐられないことは、遺憾ながら私も容易に認めるものであります。あなたは、科學の現状においては、意見を持たぬ方が賢明であると言はれる。しかし私は一つの意見を持つてゐる。長い間の實驗的な研究によつて、意見を持つ權利を獲得したからである。そして公平な人ならばすべて、この意見を分ち持たれる方が賢明であらうと思ひます」

「私の意見——いや確信といつた方がいと思ひますが——によれば、あなたの言草ではないが科學の現状においては、自然發生論は一つの幻想である。何故なら、私の生きた實驗が、自然發生論は一つの幻想であると證明してゐるからであります」

「一體あなたは科學の進歩について、どんな考へを持つてゐられるのでせうか。科學は一步二

歩と前進してそこで立ちどまる。そして第三步をふみだす前に、一度後退する。この第三步目を不可能にするのは、はじめの二歩によつて得た成果を放擲することではないでせうか」

「母親が幼児を立たせて——歩いてごらん、といふ。子供は一足二足と歩いて、次ぎにはよろめいて止つてしまふ。そこであなたは待つてゐましたとばかり——そうれ、お前は二足は歩いたが、三足目は出来ないぢやないか、さきの二足は無駄だつたんだよ、お前は歩けないんだよ——といふでせうか」

「眞の理論の特徴は、それが事實の表現であり、更に新しい事實を確實に豫想しうるところにある。何故なら、新しい事實とは、畢竟前の事實に連絡したものであるから、一言にしていへば、かかる理論の特性は、内容が常に豊富になつて行くところにあるのです」

この醫學アカデミーにおける討論によつて、醫學者たちの微生物に對する關心は、だんだん高まつて來た。

四

一八七四年の國民議會は、「科學、國家及び人類に對する。パストウール氏の輝やかしい貢獻」に對して、十九世紀はじまつて以來フランスの學者に與へられる三番目の國民賞レジオン・ドヌールを與へることを議決した。

「パストウール氏の發見は、醱酵及び微生物に關する世界の闇を照らす新しき太陽であつた。それによつて、農業、工業、醫學は革新された。氏の研究以前には、養蠶業だけでも二十年間に十五億フランの損害を蒙つてゐたことを思へば、これら數々の成績に對して、わづか一萬二千フランの終身年金はまことに微々たるものであるが……」と議會における提案者は説明した。

そしてこの國民賞が一つの大きな仕事の終結、恐らくは一生の研究の終りになると考へてゐる人々は少くなかつた。それでパストウールにしばらく休養をすすめる人もあつたが、彼はそんなことをいはれると怒つた。またこの表彰によつて交際社會から招かれるやうになつたが、彼はどのサロンへも現れなかつた。相變らず研究室にとちこもり、十時になると寢室へ入り、翌朝はどんなことがあらうとも八時には研究室へ現れるのだつた。(科學ペン)

斷種法の行手

近來醫學に關する問題で、最も新聞を賑はしてゐるのは斷種法である。新設の厚生省の目覺しい仕事のひとつとして取上げられてゐるためか、社會面ばかりでなく家庭欄にまで扱はれてゐる。斷種法が今日ほど盛に議論されたことはない。これはよろこばしい現象である。社會衛生の新しい仕事を斷行するには、十分の討議を経た後にやるべきだ。しかも斷種法は民族の興隆に關する重大問題であり、慎重な検討を必要とする。斷種法が今日ほど問題にされなかつた時代には、醫者はみな賛成で、世間が人情主義から反對してゐるやうに見られてゐた。しかるに現在の情勢は一變した。民族の向上、清淨化を希ふ意識の強化は、一般人に優生學の必要を感じしめ、斷種はその實行方法の最も有力なものと思はしめるに至つた。従つて世間では斷種を肯定する傾向が強くなつた。しかし意外な所に反對が起つた。今まで全部賛成の如く見られてゐた醫者達の中から、強烈な反對論が擡頭したのである。殊に精神病醫の間に異論を唱へる人が多い。これは斷種法の對照とされる精神病患者の的確な遺傳形式が未だ究明し得ないこと、治療の進歩によつて不治と斷定し難いことなどを根據としてゐる。

優生學や民族衛生を否定する醫學者はない。しかし、まだ遺傳の決定しない患者に向つて斷種を施行することに異論の起るのは當然である。精神病の大部分が、劣性遺傳の傾向をもつものであつても、優生遺傳でない限り斷種の適應症になるかどうかは疑問である。

醫學者の中でも、生理學者や衛生學者に賛成が多く、臨床的醫學者に反對の多いのは、注目すべき現象である。理論的に押してゆけば、民族の淨化は斷種法を最も尊重することになる。しかし臨床家や實際問題として扱ふ人々には、疑問が湧いてくる。賛成者の中には、諸外國の例をひいて、日本だけ實行出来ない譯がないといふ人がある。これは驚くべき暴言で、日本民族の侮辱であらう。日本は歐米や支那などはまるで違つた國であることを忘れてはならない。斷種法は外國のものを参考にするのはよいが、あくまでも日本民族の現在と將來を十分に考慮に入れてかゝらねばならぬ。

賛成者の中にはたとへ法律として決定しても濫用をさけ、十分慎重にやればよい。事實問題としては何千人、何萬人いや何十萬人に一人しかやらないでよいことになるだらうといふ人があ

る。もしそれほど稀にしか實施出來ないものならば、民族衛生としての効果は殆んどない。何の爲の斷種法ぞ、と云ひたくなる。

精神病学はまだ完成しない學問である。その中でも常人と病者との中間にある變質者については、究明すべき問題を多々含んでゐる。

犯罪防止の立場からは、この變質者にも斷種法をしたくなる。しかし天才、偉人は勿論、社會を益する優秀な人々が變質者の中から續々出てくることは衆知の事實である。これらの區別、またどの程度のもを救ふべからざる變質者とするかは問題である。

現在計畫されてゐる斷種法は、もとより重症なもののみを選んでやらうとしてゐるに違ひない。しかし重症と云ひ輕症と云ひ、それを定める尺度の困難に逢ふだらう。私は夫婦共に徹毒があつて、二人共麻痺性癡呆になつて生んだ子供が、全く遺傳を免れて優秀な成績で大學を出て活躍してゐる例を知つてゐる。これなどは稀有な例かもしれないが、斷種したらその夫婦の家は絶え、あの立派な青年はこの世に出なかつたであらうと思ふと妙な氣もする。比較的遺傳の濃厚な病氣でさへも、こんな状態であるから、最も多い精神分離症が遺傳について未解決な今日、反對論の起るのは當然と云はねばならない。

賛成論者の根據となる事實もまた多いだらう。しかし反對論者の根據となる事實も亦多い。してみると斷種法は、まだすぐ實行するのは尙早である。もつと科學的な調査をつゞけた上で、動かない基礎をつくらねばならない。花柳病豫防などのやうに防止法がおよそ定まつてゐるのに、社會情勢のために徹底し切れずゐるのと違つて、根本に幾多の疑義があるところにこの法の惱みが存在する。

嘗つてひろまつた人情論(人道主義)や性的不能に陥るといふ誤謬はほゞ清算されたが、遺傳の暗礁は案外に大きく、急には解決しないであらう。精神病以外でも例へば遺傳しないと云はれる癩者の斷種のやうに、實狀は必要に迫られてゐながら、法令化するには困難が伴ふと思はれるものもある。

要するに現下の斷種法論議は、調査をひろげ意見を求める範圍を大きくすればするほど、即時施行を困難とする材料が澤山集まるとみねばならない。しかし、これがきつかけになつて、家系調査や遺傳研究が急に發展することになつたのはよろこんでよい。家系調査困難な日本にあつて、國家がその便宜を與へ、道を拓いてくれれば學問の上にどれだけ貢献するかしれない。

斷種法よ何處へゆく?

あせつてはいけない。じつくりと腰を据えて、國家百年の大計のために誤りない調査をとげ、大綱を樹立すべきだ。(日本文化)

音楽と神経病

私が歐洲の精神病院をみて歩いた頃は、日本のラジオの創始間もない頃で、家庭に据ゑつけるのも問題になつてゐた。機械が高價であるとか、不完全であるとかいふことも理由の一つであつたらうが、家庭の静かな空氣を亂すことを恐れる氣持もあつた。だから病院殊に精神病院などでは、ラジオを患者にきかせようなどとは誰も考へなかつた。しかし、獨逸へ行つてみると、國立の精神病院では悉くラジオが装置してあつた。レシーヴァが患者のベットに一つづゝ吊してあつた。煙草好きの獨逸人の病院では、大きな喫煙室があつて、そこにはピアノや蓄音器が置いてあつた。神経病者や精神病者には、すべての興奮的なものを避けるために、音楽などは全くきかせないだらうと想像してゐる人々には、意外な現象とみられるに違ひない。

昨年オリンピックを見に行つた友人の話では、外科の手術室でも音楽を使つてゐるといふ。アメリカでも醫療の補助として音楽を用ひることが流行し、音楽處方さへ考案されたといふ噂があ

る。

音楽には生理的に有害なものもある。例へば喧騒で食欲を減じ、消化の障碍になるものもあらう。アメリカのある消化器病の醫者は、胃潰瘍の原因の一つとして、「悪い音楽」をあげてゐる。神経系統の影響はもつと大きい。藝術の中で、最も神経を動かす力の大きいものは音楽である。音楽によつて鎮靜する神経と、興奮する神経のあることは誰でも知つてゐる。自殺を誘ふものもあるが、踊りを誘ふものもある。しかし、世人や他科の醫者の考へてゐるほど神経病に有害なものではない。ソヴェットで行はれてゐる映畫治療學では、視覚だけでなしに聴覚が大きな役割をもつてゐる。神経病の治療として用ひる映畫は、サイレントでは効果がない。殊に映畫による睡眠療法には、音楽が重要である。視覚は注意を集中し、眠りに誘ひ入れるモメントになるだけで、あとは音楽が深い眠りに陥らせるのである。

音の印象は随分根深いものである。歐洲大戰の時に、戰場で砲彈の炸裂によつて全く記憶を喪失する神経病が起つたが、さういふ患者を治療する場合に、最初に甦つて來るのは歌謡であつた。國歌や民謡をきかせる、自分の姓名さへ忘れて終つた患者が、幾度目かにはその歌について唄ひ出すことが多かつたといふ。精神病院などでも、癡呆状態になつて、自分の年齢も現在の年月日も忘れ、殆んど精神能力が使へなくなつたやうな患者が、古い歌を間違へずに唄ふことがある。オルガンを弾いたり、他の樂器を手にすると、まるで別人のやうにちやんとすることが稀でない。殊に青春時代の印象の深かつた歌詞やメロディは、何十年経つても頭の中に刻まれてゐるやうだ。年若い患者が、古めかしい歌を唄つてゐるのは、哀調があつてきいてゐる者まで涙を誘はれるものである。狂つた頭にも、過ぎし日のメロディが正しく残り、それが再生されるのだ。精神的な不調和のために、リズムが狂つたり、歌詞がとんだりする患者もあるが、歌だけは正しくうたへるものも少くない。

精神病者の幻聴には色々あるが、大別すると二種に分けられる。一つは中毒性の精神異常の時



の幻聴は、快い音楽が少く、被害的な言語が多いのである。

治療としての音楽については、まだ組織的研究はない。しかし、在來の有害説は漸時姿を消しつつあるのは事實である。「音楽處方」などいふ言葉は、今の所では夢想や試案に過ぎないとしても、醫療の中へ音楽を加へることは實現すると思ふ。身體病の治療に當つては補助的手段にしかならぬ場合もあらうが、神經病に對しては第一義的なものになり得る可能性がある。音楽處方は、先づ神經病に試みらるべきものである。

音楽家と病氣との關係は、作曲家と演奏者とに分けて考へねばならぬ。細かく分ければ更に問題は多いと思ふが、右のやうに二つの分野から特異なものがあるかどうかをみよう。音楽家の素質も色々で、これを職業病的に決定するなら簡單である。しかし、それすらも何處から純粹の職業病で、何處から本當の病氣であるかの區別が困難なものも出てくる。

作曲家は神經病、精神病が多いと云はれてゐる。これは他の藝術的天才にもみられる現象で、天才と變質とが同時に存在し易いからであらう。勿論、身體的病氣で倒れた人の方が多いが、精神病や神經病で倒れた人、又は合併症として現はれた人もある。

演奏者は、その種類によつて違ふであらうが、ピアニストは胸の病氣、殊に結核が多いと云はれてゐる。これは肩を使ふために、胸に肋膜炎を起したり、結核を起したりする誘因をつくるのであらう。結核はピアニストに限らず、他の種類の演奏家にも多い。これは演奏のために起ることもあらうが、潜在性結核患者がそのために誘發されて外部へ現はれることも多いとみねばならぬ。聲樂家には鼻や咽喉疾患が多いといふ。これは鼻の悪い人が聲樂家になるのではなく、聲樂のために鼻や咽喉を過勞に陥れて、病氣を招くことが多いのだと考へられる。

音楽家の職業病としては、演奏者の手や顎に起る痙攣が最も多い。これは神經質の人々に起る病氣で、作曲家のペンを執る手指にも起り得る。治療法は休息以外に道はない。

音楽家と病氣の實例を、少しく述べてみよう。精神病に罹つた人として最初にあげられるのはシュニーマンである。彼は遺傳的に精神病的素質をもつてゐた。同胞は皆夭折し、姉は精神病患者だつた。彼は二十歳頃から病的症狀を示してゐる。それが精神病患者として明かになつたのは四十四歳の時で、ライン河に投身して救はれたが、精神異常が激しくボンの腦病院へ入院し、二年後に死んだ。彼の病氣は精神分離症(早發性痴呆)である。彼は生來、分離症的性格でその素質の上に

精神分離症が發したのである。しかし、彼の發病が比較的後年まで著明にならなかつたのは、寧ろ幸福である。音樂が彼を狂氣に追ひつめたのでなく、音樂が彼の病氣をあそこにまで抑制し得たのだとも解釋される。

ドニツエツテイは、長い間頭痛と、憂鬱症に苦しんでゐたが、四十七歳で麻痺性癡呆を發し、三年後に死んだ。これは微毒によつて起る精神病である。

フリーゴ・ヴォルフは、三十七歳で腦を犯された。彼の病氣もドニツエツテイと同じく微毒である。彼は六年後、ウキーンで死んだが、この病氣としては長く持つた方である。しかし、精神能力の衰微する病氣だから、晩年はモーパッサンのやうに不幸だつたらうと思ふ。

ヘンデルは時々卒倒する發作があつたが、晩年に失明し、七十四歳で腦溢血のために死んでゐる。動脈硬化症があり、血壓亢進症があつたものと推定される。

グルックも時々失神發作があり、七十三歳で腦溢血で死んだ。メンデルゾンも卒死してゐるから、同じやうな病氣があつたと見られる。

バッハは不幸な眼手術の後に失明したが、死因は老衰である。マイエルベール、ハイドンも老衰死だと云はれてゐる。

モーツアルトは、腎臓炎に悩み、尿毒症で死んだ。臨終に近い頃には嘔吐があり、意識不明に陥つた。

ワグナーは心臟病で死に、チャイコフスキーはコレラで、シュトラウスは肺炎で死んだ。

シヨパンが結核で死んだことは有名であるが、ブラームスは肝臓癌で死んだ。死の一年前からカタル症状が見られたといふ。

ビゼエはよく扁桃腺炎に悩んだ。三十七歳の若さで彼を死に追ひやつたものは、ヂフテリー或は扁桃腺腫瘍だつたと傳へられてゐる。

ベエトオフエンの病氣については諸説があつて確定的のことは不明であるが、一八二一年に黄疸に罹り、一八二五年に鼻出血、血痰があり、一八二六年に感冒から肺炎になり、それ以來呼吸器のカタルが起り易かつた。難聴は一七九八年から始り、遂に聾になつたことは世人の知る通りであるが、病因は耳の動脈の硬化症が起つた爲だと云はれてゐる。死後の檢診には主治醫のヴァールーフとヨハネス・ワグネル兩博士が立會つた。兩氏はベエトオフエンの耳疾の原因を調べるために、耳の一部を切開して持ち歸つたといふから、耳疾は生前不明の點が多かつたとみえる。死因は腸チフスの後の肝臓硬變によるとも傳へられてゐる。樂譜出版業者ハスリンドルが配布し

た死亡通知と葬式の案内状によると、「水腫のタメ病歿致シ候」と書かれてゐる。生前四回外科手術で水を取つたといふから、腹水があつたとみられる。脚にも浮腫が來たと書いてある文獻もみえる。彼を最も苦しめたものは難聴である。そのために彼は自殺さへ考へた。これは神経病的な自殺企圖ではなかつた。藝術家の痛ましい絶望として同情を禁じ得ない。それに堪へて最後まで病苦と闘つたベエトオフエンの強い生命力を讃へたい。五十六年の生涯は、決して短くはなかつた。彼が地上に生れて來たために、人類の音楽はどれ程進歩したか知れない。彼を惱ました諸々の病氣も、今にして思へば彼の不屈の精神を鍛へることに役立つたかも知れぬ。(音楽世界)

陶器と精神分析

先夜、ある精神分析學會へ行つたら、私が陶器好きだといふことが知れてゐるらしく、鑑賞心理について質問を浴びた。世間では、精神分析といふものは、精神病の醫者がみなやるものだと誤信してゐる人が多い。所が、精神分析を支持してゐる人は、醫者よりも文學者や、文學愛好者に多い。この理由はこゝで述べるのは、おかしからやめておくが、私も精神分析學派ではな

らうし、きゝたい人の多い間もないだらう。私は困つて、こんな風に答へた。

「あらゆる工藝美術の中で、最もあきないものは陶器だと思ふ。知れば知るほど愛情が深くなる。鑑賞の難しいことから云つたら一番だらうが(窯のこと、歴史のこと等々)、親しむことから云へば、これほど簡単なものはない。どんな無趣味な人でも陶器を一つも持たないものはない

い。われわれは赤ん坊の時から、死水をとつて貰ふ時まで、陶器から離れることが出来ないのだ。それに美術品の中で、こんなに愛撫できるものは他にない」

すると、ある人が重ねて訊いた。

「では、陶器の観賞は觸覚ですね」

「いや、さう簡單にも云へない。手で撫でるのも観賞の一つであらうが、色や形はどうでもいゝ、その所持者の由緒來歴だけに心ひかれる人もあるし、年代や窯や作家の名に感心する人もある。値段にだけひかれてゐる一番下等な観賞家もゐるし……」

「何故そんなに値段の差があるのです」

「何しろ陶器ほど價格の激しいものはない。一錢の茶碗から二十萬圓の茶碗まである。こんなにかげ離れたのは、陶器の実用性と貴族的な茶人趣味のせいだらう」

この時、また別の人が私に迫つてきた。

「もう一度ききたい。愛陶家はやはり、あの肌をなで廻すのに一番快感を覚えてゐるのではないですか。精神分析的に云へば、何か性的な満足がそれによつて得られるのでないですか」

私は思ひがけぬ質問に、たぢろいだが、やがておかしくなつて笑ひ出した。するとその人は更につめよつてきた。

「老人や年配の人の陶器を愛するのは、失はれた性愛をそんなもので慰めてゐるのでないですか。若い人だつたら、異性に恵まれぬ人、夫婦者だつたら、妻に満足しない人が陶器を愛してゐると云へませんか。女の愛陶家がない所をみると、どうも性愛の代償と思へますね」

陶器に関する文獻は無數にあるが、私は未だ曾てこのやうな鑑賞法に接したことがない。精神分析が民衆に人氣があるのは、かゝる面白い解釋が成立するからだ。同夜はある分析家によつて、「ネクタイの分析」の披露があつた。ネクタイは男の性器のシンボルである、女は喧嘩する時は必ず男のネクタイを引つぱつて苦しめる、女に人氣のある男はネクタイに凝るし、澤山もつてゐる。男装好きの女も、ネクタイだけは避けてゐる。ノー・ネクタイが夏になると流行するが、あのふやけた感じは男性的魅力に乏しいではないか。ネクタイは男性の性的特色だ……といふのが分析の主眼だつた。

この筆法でゆけば、陶器愛好の分析は前述のやうに性的なものになるかも知れない。恐ろしいことである。この頃流行の陶枕などは、専ら冷い感觸を尊ぶもので、精神分析家からみたら、更に性的なものになるだらう。あの物凄い新聞廣告に、この一文を引用される日がくるかも知れ

ぬ。

支那人が玉を愛するのは、形や色彩よりも感觸にあるのだ、あれを肌につけて悦ぶのが鑑賞の第一義だ……と主張してゐた人かあつた。玉はどうか知らないが、陶器を性的な意味で愛撫する無意識心理があるだらうか。煙草好きな西洋人が、遺言書にパイプの手入法だけしか書かなくて、慾張りの未亡人を失望させたといふ話がある。細君より壺を大事にする愛陶家もゐるだらう。しかし、愛陶家必しも愛人を持たぬ青年ではなく、不和な夫婦者でもなからう。世の陶器を愛する人々よ、安心して壺を、皿を、茶碗を撫でたまへと云ひたい。(茶わん)

蒐集狂の犯罪

蒐集本能は、誰にでもあるもので、決して病的な人間に特有なものではない。しかし、それが昂じてくると、蒐集癖になる。それがさらに發展すると蒐集狂になるものだ。この三つには、判然とした區別がない。要するに程度の差だともねばならぬ。だから區別の困難が伴ふものだ。他の精神症状などに比べて、見逃されることが多いので、病的蒐集だけで狂人といふ診断を下される場合は少い。

一般に蒐集狂とよばれるものは、學問的の症状を指すのではなく、常識的の判断によることが多い。だから蒐集狂といはれても、自慢する人こそあれ、腹を立てる人は少いものである。しかし、本當の意味での蒐集狂には、もつと病的なもの、犯罪的なものが含まれてゐる。

常人と狂人との心理が、劃然とした區別がなく、つながつてゐることが多いやうに、蒐集狂の心理も病的と正常とがつながつてゐる。けれども、その軽いものと重いものを比べた場合には、

大きな違ひがみられる。

蒐集本能は、動物にも存在するが、彼等の生活の單純さはその範圍を狭くしてゐるし、軽度のもが多い。しかし、人間はその生活が多様なために、蒐集物の範圍が廣く、欲望も強く、その動機と目的によつて、多種多様な蒐集が生れてくる。

蒐集の動機があまりに個人的であつたり、奇矯であつたりする場合は、狂と名附けられる。また、集め方が必要以上に激しかつたり、理由が第三者に背けないやうなものも、狂の部に入る。

蒐集には珍しさも必要であるが、量や數の方が一層重大になつてくる。だからいはゆる蒐集狂は、玉石混淆のものを所藏してゐる人々に多いものだ。

書物の蒐集狂の話は、それだけで幾十種の本が出版されてゐる位澤山ある。珍奇を求める例としては、世界に一冊しか残つてゐない本を蒐集したと信じてゐた愛書狂が、他にも一冊所藏者があるとして、千金を費して入手し、それを焼き捨てて漸く安心したといふ話がある。また人間の皮膚で装幀した本を集め、遂には自分の戀人の皮でつくつたといふ例もある。もつと犯罪的なのは、ある大學教授がその位置を利用して各所の圖書館へ行き、珍本の題扉タイトルページを切り集めて一冊の本をつくり、ひとり楽しんでゐたが、發覺しさうになつたのと、良心の苛責に堪へかねて自殺

したといふ悲話がある。その人の心理は、珍しい本の一部づつを集めて稀有な本を所有し得たといふ悦びとともに、それらの本が自分の力ですべて不完全なものになつて終つたといふ痛快さを味はつたのである。嫉妬と蒐集慾がその犯罪の動機とみてよからう。

切手の蒐集家は、數へつくせないほどある。しかし、その程度もまた無數である。私がかつてイギリスで知り合つた蒐集家は、もう自信がついたので、ロンドンの大英博物館へ行つて切手の陳列室をみに行つたら、あまりによく集めてあるので「まるで下劑をかけられた」やうに蒐集慾が消失してしまつたと告白してゐた。ところが、切手蒐集狂になると、そんなことではへこたれない。擴大鏡で四方のギザギザをしらべ、それが曾てつながつてゐた四方の四枚を集めて、完全に揃へなければ満足しない。それを完成するには、何千枚集めなければ遂げられない難業だといふ。同じ年代、同じ切手、しかも双子や三つ子のやうに、びつたり一緒にくつついてゐた同胞の切手を探すのである。生涯かゝつても、めぐり逢へるだらうかと案じられるが、切手狂にはそんな安價な諦めは無用である。ルーペを片手に、切手の山をこつこつ登つてゆく。無駄をしたり、骨を折つて集めるところに、蒐集狂の悦びがあるのだ。

支那の後宮何千人などいふ話は果して好色蒐集狂とよんでいゝかどうか知らないが、醜具を集

めたり、その袋を集めたり、恥毛を集めたりするのは、明かに狂と名づくべきである。その毛で枕をつくつて喜んでゐるやうな人間があるともいふが、さうなつたら患者として病院へ監禁してよ。

蒐集狂は必ずしも金持ではない。金の苦面をして集めたり、金がないのに集めるので一層熱が出るのだ。しかし、金持の蒐集狂は、あまり樂々と買へるものに興味が湧かなくなる。金で買へないやうなものを、何とかして集めたくなくなる。そこで公共物をねらつたり、人がどうしても手離さぬものをねらふ。珍しいものは、多くは古いものである。古い立派なものの残つてゐるのは寺だ。寺が蒐集狂にねらはれるのは、かうした心理の蒐集狂が多いからである。

日本の探偵小説の發展しない理由の一つは、寶石に對する愛着が少いからだといはれてゐる。西洋では寶石の蒐集狂が多い。そのための犯罪が如何に多いかは、讀物や映畫でも知ることが出来る。しかも寶石は、身體につけられてゐることが多いので、それを奪ふための殺人事件が起り易いのである。

ある時、私は蒐集狂だけで診察を求められた。患者は中年の女だつたが、生來几帳面な性質ではあつたが、整理と蒐集が昂じて一度手にしたものは決してすてないで身邊に蓄へ、遂には便所で使つた紙さへも保存するやうになつたといふ。診察すると癲癇性精神病だつた。狂人の蒐集症は、常人の蒐集狂と區別のつかないものもあるが、無意味なものや醜惡なものを集めるので判然と區別の出来ることも多い。

また、今まで教養も高く、蒐集狂的なところはあつても理解し得たものが、急に低級な蒐集家になつたり、グロテスクなものまで集めるやうになつて發狂を示すこともある。

千個集めようとするマニアは、それが完成すると同時に、今度は一萬個へと目指し易い。そのために品質が下落したり、無理をして犯罪に陥る危険がある。蒐集狂の犯罪は、それが如何に巧妙であつても、精神に變調がきたのでないかを疑つてよいし、一見愚劣な方法であつても、病的症状でなくマニアの昂じた犯罪でないかと疑つてもよい。マニアは健狂二界にまたがつてゐるので、早計の判断は禁物である。

ある文學者はその隨筆の中で、某家の所藏にかゝる美術品をあまりに澤山みせられたので、一つ二つそつと袂に忍ばせて盗んで歸りたくなつたと告白してゐた。デパートや書店の萬引も、必ずしも氣の小さい人ばかりの犯罪ではない。あゝして目の前に欲しいものの山をみせつけられると、盗心が湧くのだ。それが成功すると、習慣になつてくる。

盜癖に自ら悩む人が、手を懐ろに入れて自制してゐるのに、何時の間にか手が出て品物が懐中に入るときが、恐ろしい心理である。蒐集狂を辯護したり、萬引に同情したりすると「お前も怪しいのだらう」と邪推されさうだからこゝらでやめて、醫者らしい結論をつけよう。

蒐集狂の治療法は、時々「下劑」をかけることである。この下劑は自分のおよばない大蒐集家を見つけるのが第一である。それでも却つて熱が出るやうならば、整理して品質を向上させることだ。蒐集狂は盲目になり易い。いゝものはそんなに無數に集まるものではない。集めすぎると屑も入つてくる。數で自慢してはいけない。立派なものが揃はねば、一流の蒐集家ではない。教養を高くし、自分の蒐集品を再検討することが大切である。それによつて出すぎた熱がさがつてくる。これで無用な勞力がはぶけるし、犯罪の豫防にも役立つだらう。

しかし、この反省が出来ず、益々昂じてゆくならば、豫後不良である。日本の富豪連中が、ろくに見もしないですぐ倉庫に死藏するやうな美術品の蒐集法をやめて、そつくり美術館に寄附して一般に公開するやうになつてくれれば、この病氣の治療にもなると思ふ。

もう一つの治療法は、蒐集家に仕事を課すことである。その蒐集が人生に役立つものであらしめるために、研究または報告の義務を負はせるがよい。その面倒さや勉強を怠るやうな者は、資格がないことにする。これは一見困難のやうだが、非常時制限法を守る心掛があるなら、できないこともあるまい。

人生を益し、文化を向上させるやうな蒐集は、大いに奨励してよい。しかし、愚劣な蒐集や病的なもの、警戒を要するし、やめた方が自他ともに安全である。(大阪毎日新聞)

我國の藏書醫家

歳末多忙中の寸暇を割いてこの稿の資料を得るために、入澤達吉、富士川游、藤浪剛一の三博士を訪ねた。三先生共に私のために、懇切な教示を與へられたことは感謝に堪へない。殊に入澤先生には種々配慮を得たが、締切の切迫と紙數の不足のためにその厚誼に報いる調査のできなかつたことを憾む。「チバ時報」の特輯號は意義ある企劃で、我國では全く未開拓の領域である。私の一文は拙く短いものではあるが、これがきつかけとなつて將來我國にもこの方面の研究の出現を待望する。私の訪ねた三先生は、日本に於ける最大の醫學者であると共に最もよく醫籍に通曉してゐられる先覺者である。これらの先生の存命中に詳細な記録をとつておかねば、日本近代醫學史に於ける書誌學や藏書醫家傳は、永久に埋れて終ふであらう。

私はこれが機縁となつて、學術的な調査や記録や追憶等が續出するやうにと希つてゐる。

愛書家、讀書家、藏書家は一見共通なものゝやうで實は甚しく違ふことが多い。讀書家必ずしも藏書家でなく、愛書家必ずしも藏書家ではない。そして藏書家が讀書家でないことの多いのは、いふまでもない。愛書家の中には、書狂と呼ぶものがあつて、稀觀書珍本に對する愛情が並々でない。醫家の中にもこれらの種々な人々が存在するわけであるが、茲では大體藏書家の最も名のある人とどめる。若しこの一文が縁となつて、未知の藏書醫家を知られる方があつたら御教示を乞ひたい。

入澤達吉博士

雲莊入澤先生は、當代醫家中隨一の讀書家である。先生の藏書は震災で焼けてしまつたといふが、その文庫は蒐集を意識されたものでなく、専ら讀書慾によつて集積されたものと思ふ。先生は四十年間、醫學雜誌以外には筆を執られなかつたと聞く。併し、鷗外其他の藝文の士と交遊深く、先生の讀書は廣範圍に及んだ。先生が内科學建設のために、醫學雜誌以外に筆を執られなかつたに拘はらず、鷗外の偉業を認められ、その全集の編纂に參與されたのは、鷗外に通ずる資質天才を持たれた證據であるといへよう。ニーチェの著作を始めて日本に將來して、鷗外に貸したのは先生だつた。それ以外に鷗外には色々の文獻を提供したといふ。入澤先生は「森さんは圖書館へ行くのが嫌でね、要る本はみんな買ひ集める人だつた。友人からもよく借りて仕事をする

人だつた」と語つてゐられた。

今、醫學者としての大業を終へた先生は、悠々として讀書三昧の境に浸つてゐられる。その博覽強記、學藝、文藝に通曉されることの深いのは、幾十年間に亘る先生の讀書の結果の一つであらう。先生の所藏される切抜帖や、震災を免れた諸名家の書簡集の堆高い山を見て、もし先生が鷗外のやうに早くから文筆を執られたら、日本の文壇はもう一人の文豪を醫學界から發見し得たらうと思つた。七十餘歳の老齡で、なほ避暑に幾行李もの書物を持つて行かれる雲莊先生は、讀書醫家では首席を占める人といへよう。

富士川游博士

日本の學界に醫學史を創立して、その學的價值を明かにし、自ら大著を世に示された富士川游博士は、醫家藏書家としても第一位を占める人である。その長い間の苦心談は、學界の爲め記録さるべきものであるが、謙讓の博士は多く語らず、初對面の私は質問の矢がたゝなかつた。誰か博士の傳記を書き、その研究のことや文獻蒐集の記録を作つたら、日本醫學史の爲に好個の資料となるであらう。

富士川博士が醫書蒐集に着手されたのは、明治廿一年頃だつたといふ。當時博士の苦心になる蒐集の強敵が二人あつた。まだ支那に日本の古醫書の價值を認める者の尠い中に、博士は銳意その蒐集、研鑽に努めてゐられたが、それと競ふ者が日本人でなく、アメリカ人と支那人であつた。これは今にして思へば残念の至である。

米國政府は當時赤坂に住む眼科醫ホヤトニーに依囑して、東洋の古醫書の蒐集をさせた。富士川博士はこの強敵の爲に、惜しい文獻を米國に渡してしまつたと残念がつてゐられた。この文獻は、今フィラデルフィアの陸軍衛生文庫となつて、六冊の類別目録が出来てゐるといふ。もう一人の蒐集家は、支那公使館の揚守敬だつた。彼によつて蒐集された古醫籍は、その後北京の皇室圖書館に收藏されたといふ。

富士川博士の藏書は、やがて日本醫學史や疾病史其他の著作として立派な實を結んだが、博士は苦心の藏書を京都帝國大學圖書館へ寄贈された。大正十年頃だといふ。第一回は八千冊第二回は三千冊位で、最初の寄贈になる富士川文庫の目録が京大圖書館にあつて、その副本が藤浪剛一博士の許にある。第二回の寄贈になるものゝ目録はまだ作られてゐない。その内容は醫書一般及び稀觀本も夥しい數に達してゐる。目録の公刊されてゐない現在では、その大要を知るには博士の大著「日本醫學史」に掲載されてゐる文獻目録を見るよりほかはない。多紀元胤の「醫藉考」(自

筆原本百冊)を初め凡ゆる方面の稀書珍藉が網羅されてゐる。どんな蒐集家が現はれても、この富士川文庫を基礎として参照しなければ、仕事は進められない。民間にあつて、獨りこの大業を成し遂げられた博士の功績を讃へたい。

藤浪剛一博士

藤浪博士は幼時から書物が好きで、家藏の典籍を愛讀されたり、買ひ集めてゐられた。博士が醫書の蒐集に着手されたのは大正の初年頃である。その苦心蒐集になる文庫は、震災で烏有に歸した。現在所藏される「乾々齋文庫」は其後の集成である。しかし冊數は二萬餘に上り、個人の醫家藏書家として我國第一位であらう。その類別目錄は、昭和十二年五月號からの「中外醫事新報」に連載中で、十二號(一二五〇號)まで八回に亘つてゐる。醫學の各部門に分類され、醫戒、醫史、史傳、人名錄、年表、字典、典籍考論、解剖圖報、資料などを加へてある。富士川文庫(京大作製の目錄は單なるイロハ順で不明の點が多い)もかうした整然たる類別目錄が刊行されたらどんなに有益であらう。

藤浪博士にこの書目の中から珍しいものをチェックして頂きたいと申出たら、暫く躊躇してゐられたが、やがて次に掲げたやうなものを挙げられた。

醫戒(今大路玄淵著)病家示訓、本朝醫蹟(山崎元幹)、典直瀨道三記、水戸源氏家譜、宇田川榕菴年譜、學醫通論(野間三竹著)、藪醫問答(土佐道壽撰)、白玩醫說(杉浦見襄)、醫宮玄稿(望月三英)、東門先生隨筆(山脇東門)、葆光祕錄(永富獨嘯庵)、澁谷安益文稿、典直瀨(今大路家)記錄、八譜目訣(海上隨鷗)、王碎藏圖(山脇元福)、和蘭全軀内外分合圖及驗號(本木了意譯、鈴木宗玄撰)、解體圖(平次郎解剖)、靈蘭集(細川勝元撰)、尊仁流膏藥集、眼目祕傳書、八歸國蘇呂王流眼目之書(前島主膳正)、眼科龍木醫書(葆光道人)、九畹摘要(大槻磐水譯)、泰西產科捷經(小關三榮譯)等。

藤浪博士はレントゲン學の泰斗として知られ溫泉學者としても著聞してゐるが、醫史學者としても、醫藉の書誌學者としても、富士川博士と共に當代の双壁である。その蒐集調査は精細緻密で、愛書家の一面も現れてゐる。蒐集の態度も科學的であると共に、人情的である。

「多忙な私は本屋を漁つて歩けません。目錄を見るか、本屋の持つて來たものを買つてゐます。本を買ふ時は、賣る人の身にもなつてやらねばなりません。行李一杯に集めて來てくれた本の中に、要らぬものや、もう持つてゐるものがあつても、黙つて、みんな買つてやります。返されても他へ賣れるでせう。併し、その瞬間の氣持は悪いでせう。勞を犒ふために、犠牲は忍んで買つ

てやることです」と語られた。かうした温い氣持の博士が、蒐集に恵まれたのは當然のことである。

「乾々齋文庫」はまだ盛に蒐集中である。今まで集められた二萬卷だけでも驚くべきもので、これが完成したら、日本一の醫學的古典文庫となるであらう。かうした仕事は金力だけで出来るものではない。書物は死んでゐない。生き物の様によき主人の身邊に自ら集るものだ。

森鷗外博士

鷗外文庫に就いては入澤先生の示教を得て氣がつき、數氏に訊くことになつてゐたが間に合はなかつた。森潤三郎氏著「鷗外森林太郎」の卷末に記念展覽會目錄（昭和六年五月二〇—二七日東京堂にて開催）が出てゐる。その中に「先生の薨去後藏書は悉く東京帝國大學附屬圖書館に寄贈されたので、其の際圖書館で作製された鷗外文庫和漢書目錄副本一冊を並べた」と書かれてゐる。入澤博士は洋書目錄（タイプライター刷）を所藏してゐると語つてゐられるから、この展覽會に出陳された和漢書目錄の他に、洋書目錄のあることは事實であらう。又「鷗外研究」第一六號（昭和二年一〇月、岩波書店刊）に飯島茂先生の「鷗外先生青少年時代愛讀の詩文雜誌」といふ一文がある。これは飯島先生が古本屋から入手された鷗外手澤の古雜誌で、千葉の舊居に所藏されたものが賣られて四散したものだといふ。その後飯島先生に逢つた時に、この話をすると、「森先生の様な人はないね、人の出した雜誌を読むにも朱筆をもつて校正したり、訂正したり、書き入れをされてゐるんだから愕いたよ」と語つてゐられた。鷗外藏書が古雜誌にも價値があるのは、かうした特殊の事情によるものである。

大槻如電翁その他

名著「洋學年表」等で知られてゐる如電翁は、蘭學に關する藏書家としても有名であつた。翁の遺藏書は令息の茂雄氏が保管されてゐると聞く。漢法小兒科醫の河内全節氏も漢法書の藏書家として聞えてゐたといふし、京都の漢法醫福井貞憲氏は稀觀書の所藏家であつたと聞く。

愛知縣西尾の岩瀬文庫は本草を主とした雜書が多いものとして注目されてゐる。京都の半井朴氏は西洋の古醫書の蒐集家として知られ、同じく京都の佐伯理一郎氏は日本古醫書を二萬冊位藏してゐたが、今は散逸してしまつたといふ。

尙又、大阪の皇漢醫の中野康章氏も古醫書の蒐集家として有名である。

故吳秀三博士はシーボルト文獻の他各種の醫書等を多數藏してゐられたが、歿後散逸した。故土肥慶藏博士は漢法醫書や詩文集の藏書家として知られてゐたが、それらは現在戸越の三井圖書

館に收藏されてゐる。

北海道の關場不二彦博士は「西醫學東漸史話」の著者として名があるが、外科に關する蘭法漢法や、洋書や詩文集等の藏書家としても知られてゐる。「日本米食史」の著者である岡崎桂一郎博士も醫學雜書の藏書家として聞え、歌人の久保猪之吉博士も醫家藏書家として名がある。山崎佐博士は醫事法制、防疫史に關する藏書家としても第一人者である。

まだこの他に藏書家や珍本を持つてゐる醫家があるに違ひないが、寡聞の私が聞き知つたのは以上のやうな人々だつた。

自分のことを書くのは氣がひけるが、私も本は好きで何時の間にか藏書家の末席を汚す位たまつてゐる。併しその中で少し自慢の出来るのは Vincent van Gogh に關する文獻だけである。これは私の勞作「ファン・ホッホの生涯と精神病」(上・下)を書く爲に歐洲で探して歩いたもので、二千冊近い。珍しいのは和蘭で出版された文獻である。歐米の研究書で最も多いので五十種位しか擧げてないが、私の書誌はこんなに多數調べることが出来た。書物蒐集の苦心は私にも少しは經驗がある。和蘭の田舎の古本屋で珍しい Gode 文獻をみつけたが、持つてゐた現金では足りぬ高價(邦價約二百圓)であるし、日曜日で銀行は開かず、やむなく變なホテルで一夜を明かしたことがあつた。

フランスには愛書醫家協會があり、近年愛書藥業家協會も出来たといふ。日本でもかうしたものが出来たらいいと思ふ。藤浪先生の話では本草は非常に高くなり、高低が激しいが、醫書はさうした浪がなく、漸次昇つてゐるといふ。先生は永年買ひ慣れてゐられるので、大抵の本は五十錢から一圓位しか違はず評價出来るといつて居られた。醫者以外の愛書家達は「醫書を高くして終つたのはブルジョア醫家だ。そのために吾々は法外に高い醫書を買はねばならなくて困る」とこぼしてゐる。併し、古醫書を買ふのはブルジョア醫家とは限らない。醫書が骨董品のやうにみられて高くなるのは、醫學のためにも障礙になるわけだ。富士川、藤浪兩先生が主となつて古文書に關して刊行されてゐる「時價標準書」のやうな醫書目録が編纂されたら悦ばれるであらう。

(Ciba Iho)

精神異常と不良學生

異常兒童といふ言葉は、學問的なものではない。しかし、便利なので學術論文にも使はれてゐる。これが包括する内容は、異常優秀兒、精神薄弱(低能)兒、不良兒、精神病兒、病的傾向兒等である。つまり異常といふ意味は、身體的のことも含んでゐるのだが、主として精神的事に重點が置かれてゐる。そして、優秀なものも含む筈でありながら、實は劣等なものを主としてゐる。ある人は、異常兒といへば精神薄弱兒を指し、ある人は不良兒を指してゐる。

これが兒童だけに限られて、青年や成人に及んでゐないのは不思議であるが、いつのまにかかうした漠然たる定義ができてしまつたのである。

不良學生とは、如何なるものを意味するか。これも背德行爲の多い學生といつて終へば、それまでであるが、もつと複雑な内容をもつと考へねばならない。少年は道德意識の未發達と、知能の未完成、經驗の狭小等のために、背德的行爲が多いものである。それが年齢の進むにつれて減少するのが通例ではあるが、環境が悪かつたり、何か特殊の事情があると、いつまでも残つてゐるか、却つて悪い方に進んでゆく。

現在の科學では、生來性の犯罪者といふやうなものは認めない。しかし、素質の中に犯罪的傾向をもつとみられるものの存在は、完全に否定することができぬ。この犯罪的傾向者と病的傾向者との區別は困難であるし、両者が共存する場合も多い。素質といふ漠然とした精神的資産は、科學の發達につれてその本體を漸次闡明しつつあるが、まだ疑問を澤山もつてゐるといつてよい。しかし、素質の存在を否定することはできない。不良學生の中には、一時的にさうした状態にあるものも多いが、生來性の根強い傾向者も含まれてゐる。

青春期は、生理的の欲望がすべて目覺める時であり、精神的の方面でもあらゆる方向に伸びようとしてゐる。好奇心の最も強い時だから、それを善導しないと、思はぬ方へ深入りする危険がある。更にまた暗示と模倣が強く、共鳴、雷同し易い時である。傳播力の強さと速さは、驚くべきものだ。空想力の旺盛は、現實を正視するいとまなく實行に移される。

不良學生が發生した時は、それがどうした経路を辿つてきたかを精査し、どういふ方向にゆくかを見定める必要がある。たゞ不良といつても、一時的のものにすぎないか、根強い素質の上に立つてゐるかを區別する必要がある。中等學校以上の生徒、學生ならば、精神薄弱によるものではないことは明かである。入學試験が正しく行はれてゐるならば、それらの青年は不合格になつてゐる筈だ。だから兒童期の不良行爲と違つて、低能による判断の不能によるものは少いとみねばならぬ。

しかし、精神變質が著明になるのは青年時代だから、さうした異常性格による不良行爲でないかを検討せねばならない。變質者は低能よりもかへつて知能の優秀なものに多いことがある。だから學業成績が優秀でありながら、不良學生になることがある。背徳狂とよばれるものは、知性が犯されず、たゞ道德感情だけが病的になるものである。

だから變質性の青年を鑑別するには、知能よりも感情の方面の異常がないかを重視せねばならない。變質者は、常人と病者との中間にあるもので、矯正されれば常人となり、進めば病者になるものだ。つまり病前の状態にあるのだ。かゝる危険な位置にある青年は、とかく知能の優秀のために見逃されるもので、病的傾向が強くなりがちである。不良行爲がこの病的性格の著明になつたために行はれる症状の一つでないかを考へることが大切だ。性格の矯正は、あまり年齢の進まぬうちならば可能である。

もう一つ注意すべきは、青年期に發生する精神病である。精神分裂症(早發性癡呆)は、破瓜期に最も起り易いもので、この發症の一つとして不良行爲が目立つことが少くない。これは思考の分裂する精神病で、進行すれば癡呆に陥るものである。社交性が少く、孤獨で變屈な青年、知能は優れてゐるが精神的の不調和が目立つやうな、所謂乖離性格のものは注意せねばならない。この精神病は、突如として發生して急激な進行をみせる場合もあるが、徐々に發生するために、症状が單なるひねくれと誤認されたり、一時的とみられ易い。

躁鬱病は感情の變換を主とする精神異常であり、やはり青年時代に起り易い。これは感情の發揚を示すもので、定期的に起ることがある。輕症のものは、精神病とは思はれず、單なるはしやぎ、粗暴と誤解される。憂鬱症もこの症状の一つであり、兎角神經衰弱と誤まれるものである。躁暴な感情が道德的の抑制力を失つて不良行爲をさせる場合がある。しかし、これは精神分裂症と違つて、あまり悪性のこととはやらない。悪戯の昂じたやうな、比較的罪の輕いことをやり

がちである。憂鬱症などでは、かへつて罪を過大に考へて、妄想にまで昂めて自責の念に堪へず自殺を計ることがある。

癲癇病者は特有な性格を示すもので、殘虐な行爲を平然としてやることもある。癲癇發作がなく、精神的發作だけがあつたり、發作はなくても性格が癲癇性の爆發的、狂暴性で、僅かのことゝに奮激して殺傷事件を起したりすることがある。精神分裂症や、それに類似した性格者も利己的であり、自己中心的なものだが、癲癇者はもつと自我性が強い。

性慾の異常は、それだけあつて他に全く缺陷がないやうな者は少い。大抵は他にも病的症狀がみられるものである。しかし、青少年は他の道德的發達が低いと同様に、性慾異常が正常なものでも起り易いことを知らねばならぬ。青少年は、とかく性慾異常が目立つものである。だからそれだけで、すぐ病的者と診定することはできない。殊に身體的發達が旺んで、生殖腺が急に活動する青春期は、そのために徳性が被はれて終ふ。

不良學生を調べる時に、その性的方面を最もよくみてやる必要がある。少年時代には、正常者でも幾分變態的の傾向がある。それが年と共に消失して、正常な性愛が完成するのだ。あまりに慾望が抑へられたり、解決、昇化されないために、それが激しい精神葛藤の原因になり、不良行爲となつて現はれる場合も少くない。

この性的本能の發展の過程にある青春期の變調が、不良學生とよばれるものゝ中に相當多數あることは、誤りない事實とみねばならぬ。性慾をたゞ抑壓することは考へものである。しかし、それを満すことが必ずしもよいとは云へない。結婚前の學生達は、性慾が他のものに變るやうな生活に導くべきである。現在の學生生活は、あまりに暇が多すぎると思ふ。その餘暇を有効に使用道知らなければ、本能がのさばることになる。教育者はこの餘暇を、どうしてゆけばよいかを教へるべきだ。學校以外の生活に、指導原理をもつことは父兄と教育者の重大な責任である。理性や知性が、感情や慾望にひきづられ易い青春時代は、抑壓だけでなく、溫かい理解をもつて導かぬと、反抗心を強めるだけに終るものである。(校外教育)

情死と殺人

原因と方法の變遷

社會學者クレーラーは自殺を一つの時代病とみなし、それは奢侈病であり、不行跡病であり、煩悶病であり、過勞病であつて、殊に都會病としては著明なものであるとした。しかし、情死は自殺の二重奏であり、もつと複雑な要素をもつてゐる。情死の定義も人によつては、心中と同意義に解釋したり、愛し合つた男女の自殺のみを指したりして、一致しない。ここでは情死の意義や歴史や分類をやめて、現代の情死者の心理的の方面にのみ限つて述べてみよう。

どんな年齢の男女が最も情死するかを統計で調べてみると、男女共に二十一歳から二十五歳までが首位で、二十六歳から三十歳までがこれにいである。つまり二十代が最も情死し易いことになる。第三位が十六歳から二十歳までの年少者である。これは大正年代までの概観で、近來は

段々若い者の情死者が増加しつつあると思ふ。二十歳から二十五歳までと、二十歳以下が最も多いのだらう。

職業別でみると昔から近年まで女は娼妓が最も多く、藝者と人妻がこれにいで多かつた。しかし近代では、喫茶店ガールやカフェーの女給が著しく増加してゐる。これは注目すべき現象である。

季節から云へば夏が最も多く、春がこれにいである。一般の自殺者、精神病者の發生と同じ曲線を辿つてゐる。これは環境や特定の事情による情死も、生理的の波をうけることが最も多い證據とも云へよう。

情死を決行する時刻は、未明が最も多い。これは一人の自殺と違つて、相手の同意を要することゝ別れを惜しむに時間のかかること等の事情を考へると當然な現象である。殊に無理心中などの場合は、相手の熟睡中に行はれることが多いので、未明が最も選ばれ易い。更に又、情死の場合には自殺の手段が複雑になつてくるので、深夜か未明の人目の少い時に決行する必要がある。

方法から云へば、以前は入水、刃物、縊死、轢死等が多かつたが、近年は三原山火口へ投身することが流行し、最近は藥品によるものが最も多い。以前の方法是失敗が多く、非文化的の感じ

がして近代人には好まれない。美的で、失敗の少い、科學的な方法がよろこばれる。しかし、醫學的知識に乏しい情死者が、薬品の效力や容量や用法を知らずに失敗することの多いのは、世人の知る通りである。

原因としてあげるべきものは、無数にあるだらう。生活苦から逃避しようとするのが最大の原因であることはいふまでもない。戀愛の行詰り、破綻が主因と見られることが多いが、單純に戀愛のみによる情死は案外少いのではないか。他の原因がそれに附隨して彼等を苦境に落してゆくのだ。更に考へられるのは、一種の虚榮心である。單一な自殺で終るべきものを、美化したいために強いて同行者を求めることが多い。この傾向者が結びつくと、同情的心中が行はれる。同性愛も病的に亢じた場合は、嫉妬を完全に消殺するために心中として終りをつける。もう一つ大きな原因は時代思想によるもので、これは一種の流行心理である。センチメンタリズムに浸りやすい時代であり、ニヒリズムに陥り易い青春期は、心中にまきこまれる危険がある。一人心中や三人心中などは、純粹な情死とは云ひ難い。また情死者が死に際して恨みのある者を道連れにしたり、戀愛關係のない男女が一緒に死ぬのを道連心中と云ふが、これも變形である。

最も多い喫茶ガールの死

古來最も情死の多かつた娼婦の生活は、現在でも悲惨なことに變りはないだらう。しかし、社會の進歩と共にその境遇は幾分改善されたであらうし、彼女等自身の教養もかなり向上したであらう。これが情死の濫出を幾分防いでゐると思ふ。藝者の境遇に至つては、一層進化したらしい。彼女等は男の玩弄物ではなく、男と共に遊び、生活する意識を増して來たと思ふ。情死が生活を知らぬ年少の藝者に少いのは、この事實の具現とも考へられる。

これに反して、もつと解放的で、文化的な職場である筈の喫茶店やカフェーにゐる女達の情死が急激に増加した。殊に喫茶店ガールの情死の増加は、昭和の新流行の一つである。この原因はどこから湧くか。先づ現在の社會情勢から、彼女達は一日も早く職業につくことをあせる。未だ社會的の知識と訓練に乏しい少女達の働けるところは、喫茶店である。そこに集まる人々を考へてみよう。有閑階級を除いては、職につけぬインテリ青年や、薄給サラリーマンが多い。彼等は過勞に悩みながら休むべき暖い家がなく、愛人と楽しむ金がない。僅に許されるのは喫茶店である。センチでヒステリックな彼等は、甘い音楽をきき、少女達を眺めて何もする氣力のない夜を

一二二
す。さうして結ばれる少女と青年の戀が、家庭を持てる譯がない。空想と現實の大きな開きが、彼等を死へと誘ふ。少女の境遇が悲しかったり、青年の不遇に同情したりして結ばれた若者達が、生活苦の深刻な所まで味はずに、あつさりと死んでゆく例が少くない。

思春期の悩みから三原山へ急ぐ若い同性や、異性の道行が數年前流行した。天國に結ぶ戀とかいふ甘い情死が新聞を賑はし、映畫にまでなつたことがある。新聞社でもあつた記事を大きく取扱ふことが、若い者の流行を唆る危険を感じてその後は報道しなくなつたが、事實は少しも減少はしてゐないだらう。

人妻の情死の場合は、多くは年下の男が相手に選ばれる。それには中年の女の愛情に無理解な良人の罪も責任を分たねばならぬ。仕事に熱中したり、家庭以外で女の愛情を楽しむことの出来るやうになつた中年男は、單純に妻が子供や着物その他の物質の充足に甘んずるものやうに考へる。時間の餘裕の出來た女は、さうしたものでだけでは満足しない場合が多い。かかる時に近づいて來る小兒型のおとなしい青年や年下の男が、彼女の情熱のはけ口となる。それが家庭的に、世間的に彼女の虚榮心を傷けた場合に、懺悔といふよりもむしろ自棄的に情死が決行される。

高年者同志の情死は稀である。老人が若い女を妻や愛人とした場合に、嫉妬によつて無理心中をすることがあるが、高年の女は愛人よりも金をためることに熱中しやすいから、この逆の心中は少い。

外國のある學者が、老いて研究が出來なくなつた時、妻と共に毒藥を仰いで靜かに死んだことがある。かういふものは情死ではなく、理死といふか、學問死といふか、痛ましい學者の最後である。

現下の社會情勢は、益々生活難と結婚難を深めつつある。情死を讚美するやうな傾向は、昔から日本人の心の片隅にこびりついてゐる。しかし情死が自殺と同様に、人生の敗北であることは誰も知つてゐる筈だ。それに打克つやうな強い生活を讚美したいものである。

四つの動機

佛者は罪惡の根元を三毒の煩惱——哀愁、瞋恚、愚癡——に歸した。殺人の動機もこのいづれかに關係をもつものであらう。殺人の統計をみると大體、經濟的動機、色情的動機、感情的動機、病的動機の四つに分けることが出来る。これらは純粹に獨立してゐるものもあるが、數種を兼ねたものや、判別の困難なものもある。ロンブローゾは先天的殺人者といふものの存在を主張

した。つまり生れつき殺人を免れないやうな本来性の犯罪者があるといふ意味だ。しかし、これは今日では全く否定されてゐる。性格の特徴の遺傳は認められるが、犯罪は素質だけでは成立しない。社會的、家庭的の環境が加はつて、初めて形成されるものである。

右の四つの殺人者の動機の中で、最も多いのは經濟的動機である。これは社會情勢が經濟的困難を増すにつれて、一層多くなる。色情による殺人も重要なもので、「色と慾」といはれる位經濟的動機とも結びつき易い。感情的動機といふものには、一時的の精神感動によつて行はれる衝動的殺人もあるが、恐怖、憎惡、怨恨、復讐、憤怒等によつて決行されるもので、必ずしも突發的ではない。これには熱血的なものと、冷血的なものがある。病的動機による殺人は、精神異常者の妄想や妄覺によつて行はれるものが多いが、中には無動機とでも名づくべきものをも含む。何等殺人の動機となり得ないことに刺戟されて行ふもの、又自分も全く意味が解らずに行ふことがある。

年齢的に殺人者を見ると、青年は色情的動機や、熱血性の感情的動機が多く、中年以上の者には經濟的動機が最も多く、冷血性の感情的動機がこれについてゐる。

殺人の方法から云へば、經濟的、冷血性感情的の殺人は計畫的のものが多く、毒殺や絞殺が多い。色情的、熱血性感情的の殺人は、兇器を用ひる慘殺や射殺によることが多い。病的殺人もこれに類する。

科學の進歩と普及は、殺人の方法に利用されることが著しく殖えて來たかに見える。科學はまだそれを完全に防止し得るまでには至つてないが、それをあばくことは出来る。科學的方法による殺人や、巧妙な知能的殺人は、被害者を苦しめることが少いかも知れない。しかしそれは冷血的にみえて、激しい憎惡感を抱かせることは、舊式な兇器や方法によるもの比ではない。犯罪は巧妙なほど、不人情で、憎らしい感じを興へる。探偵小説は殺人小説でもあらう。吾々があれを讀んで楽しめるのは、スリルや推理や解決を享樂するからだ。實際問題として、ああしたこと吾々の近くに行はれたら、どんなに腹が立つだらう。

文化が進めば知能的な方法による殺人が殖えて、暴力的な殺人は減少すると考へられる。しかし、過敏と性急は文化人の特性である。理性と感情の不調和は、却つて冷靜な殺人法を妨げるとも云へよう。

病的人を除いては、誰も感情の昂揚なしに殺人を行へるものでない。巧みなトリック殺人の描寫を得意とする探偵小説作家が、實際問題となつては人を蹴殺すこともあり得るわけだ。この意

味で私は殺人方法の進歩といふものは、事實は案外少いのではないかと思ふ。人を殺す時は、動機は色々あつても手段は冷靜を缺き、無理な方法を強行して發覺を早めることが多いのだ。だから科學の進歩や探偵小説の流行は、殺人の奨励にはならないし、それを悪用するものは意外に少數だと思ふ。(讀賣新聞)

文化と流行藥

流行藥といふ言葉は、誰の新造語であるか知らないが、考へて見るとおかしい。多分新聞社が造り出したものであらう。新作の動機は云ふまでもなく、昨年の小學校長毒殺事件以來有名になつた青酸加里を、自殺の目的に使ふ流行が見えたので、當局がその文字を使ふことを嫌つたからである。

流行藥と云へば何か新發見の藥が一世を風靡してゐるやうに聞えるが、實はずつと前から使はれてゐる青酸加里のことを云ふのだから一層おかしい。それを不審がらないで流行藥と云へば、「あゝあれか」と、民衆も肯くやうになつたのは、ジャーナリズムの力の大きさを示すものとして驚かざるを得ない。

しかしかうして弘まつてしまへば、新造語の意味も薄れて、當局が意圖したやうな豫防的效果はなくなつたと云はねばならない。眞の流行藥はまだ他に澤山ある筈なのに、それが青酸加里だ

けに限られてゐるのは、面白い現象である。これは伏字の逆効果のやうで、却つて好奇心を咬る
ことになりはしまいか。

本當の意味における流行薬は、青酸加里などよりもむしろ、催眠薬と麻薬であらう。文化生活
は生活の繁劇と享樂への追求の結果、睡眠時間を減少せしめる。吾々は短時間で熟睡しなければ
ならない。これに用ひられるものは催眠薬である。かつてはアルコールの消費量が、その國の文
化のバロメーターであつた。現代でも酒の消費量は、減少してゐないであらう。だが疲勞を恢復
し、安眠を得るには役立たない。そこで催眠剤が多くの人に用ひられるに至つた。今では催眠劑
の消費量が文化のバロメーターになると云つてよからう。

麻薬は(阿片、モルヒネ、コカイン等)古代から東西共に存在したもので、「アラビアン・ナイ
ト」や、デユウマの「モンテ・クリスト伯」、ボードレールの「人工樂園」、ド・クキンシーの「阿片
溺愛者の告白」、ユクトオの「阿片」等にも取扱はれてゐる。これはかつて未開の國にのみ用ひら
れる薬だと思はれてゐたが、いつの間にか文化人の手に入り、その弊害は日に増して擴大しつゝ
ある。西洋では未開國の弊害のみに注意して、自國への侵入を忘れてゐた。氣がついた時には既

に夥しい麻薬中毒者が、文化人の間に弘まつてゐるのに驚き、對策に腐心してゐる。今では國際
阿片會議が設立されて、各國は協力して中毒者の撃滅に當つてゐる。

未開人の間に麻薬が弘まつたのは、教養の不足のために迷信に促はれたものも少くない。例へ
ば、阿片は萬病の靈薬だと信ぜられてゐたために、濫用の風習を招いた。しかし文化人は教養が
あるから、麻薬に對する知識は持つてゐる。たゞ最も安易にしかも迅速に苦痛を減少せんがため
に、麻薬の濫用を始めた。更に享樂の手段としてこれを用ひようとする人がある。これは未開國
の流行とその動機が違ふので、嚴密に分けねばならない。もとより中毒に陥る人は、意志の弱
い、性格的に缺陷のある人に起き易いものであるが、中毒者の恐ろしい症状は、未だ充分には、
世人に知られてゐない。麻薬中毒者の治療には、先づあの痛ましい癡人の様子を見せることが急
務である。肉體が損はれるばかりでなく、精神的にも全く駄目になり、見る影もなく哀れな姿に
變ずる。勿論麻薬は醫療としては必要である。その用ひ方によつては治療にも役立つ。しかし必
要以上に用ひる場合は、忽ちに中毒症状を起す。だから麻薬は醫者以外のものは絶対に用ひては
ならないことを知らねばならない。藥物の作用をよく知らないで用ひることは、治療よりもむし
ろ症状を變化させ、或は増悪せしめる危険を伴ふ。

もう一つ近來流行してゐるものに、強精薬がある。若返り法や、不老長壽法は、科學の批判によつて大部分抹殺された筈であるのに、まだ次々と新しいものが案出されるのは、文化の發展に伴はない現象の一つである。醫學の進歩がまだ完全な若返り法や、不老長壽法を發見し得ないのは昔と大差ないが、この結論だけを以て科學を否定してはいけない。未完成であることは昔と同様であつてもその途上における調査や研究の進歩は驚くべきものがある。内分泌の研究や、ホルモンの人工製法などは、まだ完成はしてゐないが、合理的な進歩の過程をたどつてゐる。

科學の進歩がこゝまで發達してゐる現代において、まだその性状や、效力の決定を見ないものを用ひて、強壯劑、強精劑に役立てようとするのは非文化的である。しかもそれが、教養の高い人達にまで用ひられてゐるのは不可解である。例へば彼等はこの頃支那或は滿洲渡來の或種の蟲を、生きたまゝで飲んでゐる。それが人傳へに效力があると云ふことを聞き、そのまゝ無批判に信用して用ひてゐる。他の問題では随分高い教養を持ち、批判と検討なしには承服しない人々が、藥のことになると無知な人々と同様な雷同振りを示してゐる。これでは聲樂の試験をうけるために、苦しんで蛞蝓をのむ人を笑へないではないか。

「蝮酒」の流行も同様である。これはホルモン療法的一種とも考へられ、全然意味がないこともないが、強烈な蝮からとられたといふことに魅力があるので、效力から云へばおとなしい牛の臓器からとつたものと大差ない譯である。

要するに長命法や、若返り法には、心理的な効果を狙つたものが多い。藥の效力はもとより、心理的な働きも非常に加はるものであるが、この種のものには特にその傾向が強い。現代生活は日に増して苦しくなつて行く。こんな浮世に未練がないと、見切をつけて死んで行く人も多いが、一方一日も長く生きて、よりよい生活に入りたいと願つてゐる人も多い。だからどんなに文化が進歩しても、不老長壽術は廢れない。

藥ではないが料理などでも、榮養の豊富なものを選びたがる。趣味の豊富なものを喜ぶ近代人は、食慾においても好奇的なものにひかれ易い。しかしその一方には絶えず榮養の豊かなものと探してゐる。牡蠣を食べるにも、不老長壽に役立つとか、玉子の何十倍の榮養があるなど書き立てられてゐると、つひそんなに食慾がなかつた時でも、食べて見ようとする。

支那料理の流行は、いろいろの意味があらう。集團的に一つのテーブルを圍み、長時間に亘つ

て食べられると云ふ料理の形式が、現代生活に適合してゐるのもその理由の一つであらう。齒の悪くなつた現代人が、あの軟い食物を喜ぶのもその理由にならう。だが世界一の不老長壽探求國支那に生れたあの料理法は、臟器料理であり、栄養豊富なので、自然支那人の長壽好みに適合したのではないか。ホルモン流行の現代日本人が、支那料理に集る心理の中には、この意味で、長壽に役立つと云ふことを、知つてゐることも見逃せない。

かうした現代に流行してゐる薬及び栄養物等は、現實を逃避しようとする考と、過勞を癒やさうとする考と、長命しようと思ふ考から愛用されてゐるのだと思ふ。サラリーマンの醫療費が僅かでも支拂へない状態にある時、かゝるものに莫大な費用が投ぜられてゐることは、現代の不思議な現象である。現代人は知識の吸収を喜ぶ半面に、知識ではまだ割り切れないものへの魅力をもつてゐるのだ。科學は驚くべき發達を示してゐるやうであるが、民衆の生活の中には、まだまだその力の及ばないものが無數に存在してゐる。吾々は正しい知識と批判をもつて、迷信的なものを排除しようと思つてゐるが、生活に喰ひ入るものは、ともすると迷信的な要素を持つてゐる。流行に巻き込まれる心理には、理性を越えたものが多い。(ペン)

ある病的著作の話

書物の内容が病的思想や藝術の表現である場合は珍しくないが、それが病的な形式で發表され、しかも精神異常者の手によつて刊行された例は少いと思ふ。私はさうした刊行物のため入院を餘儀なくされた患者を持つてゐる。彼は二種の著作を私版で發表した。最初の本は菊半截で、表紙は雲形模様を浮き出した絹張で、紫色の紐で和綴にして、表題は「金に恨が數々御座る、長唄どうしやう事寒心張唄本」としてある。本文は百六七十頁で、色紙の題扉と著者肖像の口繪がついてゐる。次に出した本は四六判を横に二つ列べた位の大きさで、矢張雲形模様のある絹表紙に「變質の家、相當の記録」と題されてゐる。本文は百頁位で二段組である。

彼は富裕な金貸業の長男に生れたのであるが、變質的の行動があり父や弟との折合が悪く、一時廢嫡された事がある。以來彼は父や弟を憎み、紛争を重ねて、廢嫡を取消させた。その間に妻は四人の子供をおいて去つて終つた。彼は猜疑心が強く、被害妄想にかられて遂に著作によつて

世人に訴へようと決心した。彼は原稿を書いて印刷屋へ渡し、それが出来るると各所へ配布し、又追加を書いては配つておいた前の本に綴じて貰つた。だから本の頁附は123、一二三、アイウ、イロハ等混淆してゐたり、折込や貼りつけ等があり、インキも數色に刷り、用紙も色々な雜然としたものである。刊行の理由について彼は次のやうに語つた。

「理由は大體十五あります。當時彼等と係争中のことがあつたので、それを世人に知らせると、相手が世間から悪く思はれる事を恐れて自分との契約を履行するだらうと思つたのが一つ。又女房の身内の者に自分の立場を説明したいのが一つ。自分の文筆竝に道徳的眞價を認めしめるのが一つ。あの本によつて相手を威嚇したいのが一つ。あれによつて自分に餘裕のあるのを示したかつたのです。それでなるべくユーモアを混じて書かうと思ひました。文中所によつては窮鼠かへつて猫をはむの譬をとり、自分は神経質であつて生に執着してゐると云つて高をくくられると困るので、一面いざとなれば何をするか分らぬぞといふ心構を示したかつたのです。又かうした出版をつづけてゐると不逞の人間が怖れて近づかないだらうし、私に不遜な態度をとる奴はどしどし發表するぞと嚇したかつたのです。最初の本は先方の拔道をつくつてやる爲に、餘り攻撃的に書きませんでした。次の本では彼等が妥協しないと見てとつたので、完膚なきまでにやつつけ

ました。あの本は私の三十四の二月に出したものです。私は飽くまで俳味のあるおつな風變りな本にしたいと考へ、和綴にして紐も紫にして、表紙も絹を使ひました。表題は自分が長唄をやるので道成寺をもぢつて「どうしやう事」とし、勸進帳をもぢつて「寒心帳」と洒落れたのです。初め原稿をつくり印刷屋へ廻したが、名刺専門の小さい店で活字も不揃だし、植字工も不慣なので、もどかしくなつて、自分で植字したり組版までやりました。終には原稿も書かずに、いきなり活字を拾つて組み、印刷しました。しかも一冊を一度に完成しないで、先方の出様出加減を見て遂次追加してゆくので、配本は大變でした。和綴したのは、追補の便宜も考へたからです。二百部と稱してゐましたが、實は百部しか刷りませんでした。なるべく有效さうな人々、饒舌な人、物好きな人を選んで配本しました。警察へも寄贈しておきました。二冊目の本には、人名簿の用紙を數十頁つけました。私の本を貰つた人がそれを利用して保存してくれるだらうし、手近において利用してくれば、いつか繰返して讀むチャンスもあるかと考へました。それにこんないゝ思ひつきが私にもある、こんな奇才のある男かと感心せしめたかつたのです。私の敵達は名譽と利益の中間を追つて來て居るので、私も狂人と常人の間をゆくものの如く見せました。即ち狂人たられれば性惡にみられ、執拗な奴と誤解されて妥協の道がなくなるし、全く狂人のやうに書けば

相手にされないと思ひ、苦心して狂常の中間をいつたものです。文章も餘り整然としてゐては先方を追ひつめて、却つて奮起せしめる危険があると思ひ、専門家や法律家に頼まず、私自身が書いたのです。

ああいふ事を書くやうでは、目的の爲に手段を擇ばぬ恐ろしい人間であるといふ印象を與へやうと思ひました。だから自分の書いたものに反應がなくとも、あつたやうに確心して益々筆鋒を鋭く書き進めました。そして先方に、あの元氣では何をするか分らない、といふ不安を抱かしめようとなりました。だがあまり辛辣に過ぎては讀者に悪感を與へても困ると思ひ、所々に人情味のある挿話を入れました。例へば、手切金を取つて去つた女房に對しても切々たる追慕の情をよせ、小供たちへの愛情を誇張したりしました。かうして私の心血をそそいだ著述も認められず、私が暴力を用ゐたりしたので、すべては水泡に歸して私は病院へ收容されて終つたのです。

寒心帳の口繪はピンク色の紙に自分の紋服姿を掲げ、その下に「何となく影薄い◎印の近影、當年取つて三十四歳、眞に林長糞喰へのスマートなスタイルでせう？ シンタク金を持つて居りますぞ、……獨身ですぞ……但し金儲けの道は一切不得手で四人の子供を抱へて居ります。天下の後家否令嬢方よ締切らぬ中に御早々御申込あれ？ 而して首尾よく此の中原の豚を射止められ

よ」と書いてゐる。「變質の家」の序文にも同様の寫眞を入れ「ナニトゾヨロチク」と附記してゐる。この本には前著の正誤表を入れ、本文中にも各所に前著を補つたり訂正したりしてゐる。また卷末人名簿の前に懸賞募集のペーヂがある。問題は大小二冊の書物中に現れる魔人、魔組をあげさせたり、今後の彼等の行動を豫想せしめようとしてゐる。締切は天保八年六月十日、賞品は一等が毒身女〇〇子(先妻)、二等が桐製上等寢棺、三等がデスマスクとカルモチン一箱としてある。検印は三味線の撥を彫つたゴム判である。

内容の奇怪さや文章の調子の亂雑さもさることながら、書物としての形式の並でないことに愕かされる。これは天下の奇書珍籍の部へは入らなくとも、書物學者や精神病醫の研究材料としては興味深い本である。(東京堂月報)

精神異常者の文章

狂の文字

精神異常者といふ言葉は、普通にも使ふが學術語でもある。しかし、狂人といふのは俗語で、學術語ではない。言葉の問題のやかましい今日、精神病学でも整理と改正の運命に迫られてゐる。だが、私は漢語の難しいのを排斥するのによいが、捨てられた言葉を復活させることも考へてほしいと思ふ。狂はその一つである。精神異常者が學術的で、狂人が通俗だときめるのは偏見である。私は狂人をもう一度學術語にしたい。

何々狂といふ言葉は、明治時代まで精神病学の教科書にも使はれてゐた。それが吳秀三博士によつて、何々病に統一されて、現在では狂のつく術語は一つもない。例へば偏執狂は、偏執病に改められた。症状につけられた狂は、症の字を使つてゐる。われわれが病的とよぶのは、精神病的の意味であるが、これには一般には通用しないだらう。精神病的と身體病的の二つを含む危険があるからだ。だが、狂的と云へば誰でも精神病的の意味にとるに違ひない。

狂の字を學術語でなくしたのは、精神病学の確立のためには大きな功績があつたらうが、用語の改正をするならばこの便利な言葉を復活してもよいではないかと思ふ。文藝春秋は私に「狂人の繪」といふ題で原稿を頼んできた。いつもは、一々精神病患者と訂正する私も、今度は狂人の書いて終つた。「月刊文章」の依頼は「精神異常者の文章」とあつた。題を書く時、まだるつこい感じを受けた。そして、精神病患者と精神異常者をどうして區別したのかと思つた。編輯者は、果してこの二つの言葉を頭に浮べたらうか。學問的に云へば、精神病患者とは所謂狂人であるが、精神異常者と云へばもつと廣い意味になり、病的傾向者や、輕症者や時々異常を現はすものまでも含むことになる。

かういふ詮議をしてゐると、本題からそれることになるし、廣い意味の方が問題も多いから、編輯者の依頼通りの題で筆をすゝめてみよう。

文章の生理學

文章心理學が成立つならば、生理學も可能である。性格と文章の密接な關係は、醫學でもとりあげねばならない。しかし、もつと範圍を狭くして、生理的の視野からみても興味がある。性格と體格の間體が、クレッチユメルといふやうに決定的な關係がないとしても、かなり深い結合のあるのは否定できない。さうすると、文章のテンポ、表現の精粗などもある程度、生理的機制に左右されるのではなからうか。これは文章ばかりでなく、あらゆる制作品についても云へる。例へば陶器に例をとると、バーナード・リーチのある作品は、どうしても彼の六尺何寸かある長身の表現であり、富本憲吉の清明な色と鋭い線は、彼の細い身體の表現に他ならないとも云へよう。

文章のスタイルを規定するものは、性格が第一であるが、體格も無視することはできない。菊池寛の文章のセンテンスの短かさは、彼の明快な性情によるであらうが、あの肥満した短軀の表現でもある。もつと醫學的に云へば、彼の心臓の力が長い文章を書かせないのだ。菊池寛は性急な人らしいが、それは心臓の生理的狀態が影響してゐると思ふ。

性格の分類は困難で、現代ではまだ完全なものがない。だから文章などを材料にして、輕卒に診斷を下したりするのは避けねばならないが、ある點までは参考になるだらう。クレッチユメル

の性格と體格の法則でも、肥満型と躁鬱性氣質との關係は賛成者が多い。文章生理學でも、肥満型の人のものが比較的に看破し易いだらう。乖離性氣質と細長型體格との結合は、議論が多い。文章でもこの種の人のものが、最も判別に困難である。

精神病者の文章

狂人が悉く病的な文章を書くとは限らない。更にまた、その病氣の性質、病勢の狀態によつて違ふわけであるが、文章病理學は表現法と、内容の二方面から觀察される。

精神分離症(分裂症)、乖離病、早發性癡呆の意)は、最も特色のある文章を書く。もとよりこの病氣には種類が多く、程度もいろいろあるので、すべてが文章に現はれたものは特徴があつて鑑別できる。最も激しい病症にあるものの文章は、支離滅裂で判讀できない。精神内容が極度に自我意識に固着して、社會や家族との連絡を絶つために、第三者には意味の通じない文章ができる。新作文字や記號を濫用する患者では、文字さへ讀めなくなる。

妄想型の病症にあるものは、意味は汲みとれても内容が奇驕であり、理解ができなくなる。この輕症のものは常人との區別が困難で、文章の分析だけでは診斷ができない。

1311
麻痺性癡呆は微毒が脳の組織を侵す精神病であるが、病型によつて文章の内容と表現が違つてくる。しかし、概して誇大的の傾向を帯び、文字の拙劣、言葉の脱落、字劃の脱漏が現はれ易い。一度完成した知性が脱落消耗するので、その人の過去を知つてゐれば變化の著明なのは、一層よくわかる。あの達筆のモーパッサンが、一度この病氣に侵されてからの悲惨な状態は、目を彼はせるものがあつた。

躁鬱病は知性が侵されず、感情の發揚と沈鬱を主徴候とする精神病である。その躁揚状態にあるものの文章は、大言壯語的で誇張が多く、酒に酔つた時のやうである。言語が多辯のやうに文章も饒舌を弄してゐる感が深い。反對に憂鬱状態になるメラニコリーは、文章にもその影響が現はれて、感傷的であり、厭世的である。

アルコール中毒による精神病者の文章は、軽いものは躁病のやうで、重いものは麻痺性癡呆に似てくる。アルコールによつて幻視や幻想に支配されたり、好色的になつたり嫉妬的になつたりする病症が文章にも影響してくる。

癲癇性精神病者では、その性格の如く克明なもの、冗長迂遠なもの、殘虐なもの、宗教的なものなどが文章にも現はれてくる。ヒステリー性精神病者では、空想が現實を遊離し易く、奇驕、

街奇的、嫉妬的、好色的色彩を帯びてくる。

これらの精神病の症状は、特異なものもあるが、共通なものも多いので、鑑別に困難を感じることもある。しかし、精細に觀察してゐると、その中の特徴がつかめることが多く、診断はさまざまで困難でない。文章學の上から最も興味のあるのは、精神分裂症患者の作品で、病理學的にも無限の資料を含んでゐる。

變質者の文章

精神變質者とは、常人と狂人の中間にあるもので、病的傾向者のことである。これに屬する人々には、天才的の才能を持つものが多い。ロンブローゾの云ふやうに、天才は悉く變質者だといふ斷定は認められないが、天才の中に變質者の多いことは否定できない。文章病理學は、こゝに困難ではあるが新しい資料にめぐり逢ふのである。文化的意義の少いものしか書けぬ變質者の文章は、診断もさまで困難ではないが、立派なものである場合、それが果して病的の世界に屬するものか、健康なものであるかを決めるのは困難になる。

變態のために特異性が現はれ、興味が湧くことも多いので、この領域に屬する人々の作品の判

定は輕卒にできない。藝術的價值と、臨床的價值とは遠い距離に立つもので、これを混同してはならぬ。更に注意すべきは、幻想の世界は病的と正常との區別の最も困難なものである。兩者は判然とした境界線なしに、つながつてゐるとも云へる。病的といひ正常とよんでも、質の差よりも、程度の差の方が大きい場合が多いものである。しかも、正常の時が多く、時に病的に陥る人の文章は、十分注意しないと發見できぬことがある。

精神異常者の文章は、研究すればするほど興味のあるものであるが、この一文は短く、抽象的に終つたので、或は理解されないかもしれぬ。いつか折をみて實例をあげて、その分析や診斷を書いてみたいと思つてゐる。(月刊文章)



庫文品作



毛髮と壽命

定價金六拾錢
滿鮮蒙等外地定價
金六拾六錢

昭和十三年十二月十三日印刷
昭和十三年十二月十七日發行

著者 式場隆三郎

發行者 駒澤弘明
東京市神田區須田町一ノ二八

印刷者 松村保
東京市神田區西神田一ノ四

印刷 松村印刷所
製本 齋木製本所

發行所 東京市本郷區元町一ノ一五
作 品 社

振替東京七四二八七番
電話小石川二六二一番

751
2

751
2

行刊々續
中河與一著 全體主義の構想 最近刊
三木清著 エッセイ集 最近刊
大江賢次著 五軒長屋 最近刊
波多野完治著 心理學と教育 最近刊

1 豐島與志雄著 猫性語錄 定價六十錢 送料六錢
2 淺野晃著 文化日本論 定價五十錢 送料六錢
3 八田尙之著 シナリオ若い人・泣蟲小僧 上製一圓四十錢 定價七十錢
4 本多顯彰著 文學の知識 上製一圓二十錢 定價六十錢
5 淺野晃著 青墓の處女 上製一圓 定價五十錢
6 小林秀雄著 私小説論 上製一圓 定價五十錢
7 清水幾太郎著 自由主義とヒューニズム 上製一圓三十錢 定價五十錢
8 北川冬彦著 シナリオ文學論 上製一圓三十錢 定價六十五錢

四八二四七京東替振



一町元區郷本市京東

9 大江賢次著 道化の町 定價六十五錢 上製一圓三十錢
10 佐藤清著 詩・詩論 折蘆集 送料六錢 定價七十錢
11 八木保太郎著 シナリオ太陽の子 上製一圓二十錢 定價六十錢
12 尾崎士郎著 笑ふ戀人 上製一圓三十錢 定價六十錢
13 竹内時男著 科學陣火 上製一圓五十錢 定價七十錢
14 内田百閒著 百鬼園先生言行錄 上製一圓四十錢 定價五十錢
15 上林曉著 田園通信 上製一圓四十錢 定價七十錢
16 津久井龍雄著 課題を衝く 送料六錢 定價六十錢
17 時雨音羽著 流行歌謡入門 送料六錢 定價九十錢
18 芹澤光治良著 大空に翔けん 送料六錢 定價六十五錢
19 八田尙之著 シナリオ冬の宿・鶯 上製一圓六十錢 定價八十錢
20 井上鏡三著 衣裳の經濟學 送料六錢 定價六十五錢
21 式場隆三郎著 毛髪と壽命 上製一圓二十錢 定價六十錢

七八二四七京東替振



一町元區郷本市京東

751
2

本多顯彰著 評論	シエイクスピア襍記	並製七十 上製一四二〇錢
本多顯彰著 評論	感動と批評	並製一四 上製一四七十錢
河上徹太郎著 評論	現實再建	並製一四 上製一四八十錢
作品社編	一九三八年版 文藝豆年鑑	新菊判一四〇頁 定價五十錢
古谷綱武著 研究	橫光利一	並製六十錢 上製九十錢(再版)
古谷綱武著 研究	川端康成	並製五十錢 上製九十錢
淺見淵著 研究	ヒューマニズムと藝術	四六判三四〇頁 定價九十錢
T・E・ヒューム 評論	リユシエン又	四六判三一〇頁 定價七十錢
長谷川鏡平譯 小説	感情教育	全三册九八〇頁 定價各一圓
ジュウル・ロマン 小説	梶井基次郎小説全集	上卷一圓二十錢 下卷一圓二十錢
富澤統一郎譯 小説	電	並製八十錢 上製一圓四十錢
フロオベール 小説	時代と道德	四六判兩入 定價一圓二十錢
北原由三郎譯 小説	モオリアツク	並製一圓 兩入一圓七十錢
澁野隆三編 小説	魂を衡る男	四六判一四〇頁 定價九十錢
中山義秀著 小説	太陽	四六判二〇〇頁 定價一圓
三木清著 評論	鞭を鳴らす女	一圓十錢(再版) 特製二圓六十錢
モオリアツク 小説	津輕の野づら	並製一圓四十錢 上製二圓二十錢
辻野久憲譯 小説	浪漫主義心情	四六判上製兩入 定價一圓八十錢

七八二四七京東替振

一町元區郷本市京東



アンドレ・モオロア 小説	魂を衡る男	四六判一四〇頁 定價九十錢
原百代譯 小説	太陽	四六判二〇〇頁 定價一圓
D・H・ロレンス 小説	鞭を鳴らす女	一圓十錢(再版) 特製二圓六十錢
岩倉具榮譯 小説	津輕の野づら	並製一圓四十錢 上製二圓二十錢
岸田國士著 小説	浪漫主義心情	四六判上製兩入 定價一圓八十錢
深田久彌著 小説	ブルウスト研究	一册八十錢 四册一册三圓
ヤンコ・ラヴリン 評論	久米文夫編 雜	菊判上製兩入 定價一圓二十錢
久米文夫編 雜	懷疑と象徴	五六判上製兩入 定價一圓二十錢
中島健藏著 評論	土地の名	菊判フ랑스紙 定價六十錢
横光利一著 評論	スタヴロギンの告白	六七判上製兩入 定價一圓八十錢
ブルウスト 小説	田園記	四六判上製兩入 定價一圓(五版)
ドストエーフキスイ 小説	散論文論	普及版品切絶版 總革版品切絶版
神西清譯 小説	スワンの戀	一册一圓 半年五十九錢
井伏鱒二著 隨筆	作	
河上序・佐野裝 隨筆		
ア 桑原武夫譯 評論		
ブルウスト 小説		
井上・久米譯 小説		
小野松二編輯 月刊		

七八二四七京東替振

一町元區郷本市京東



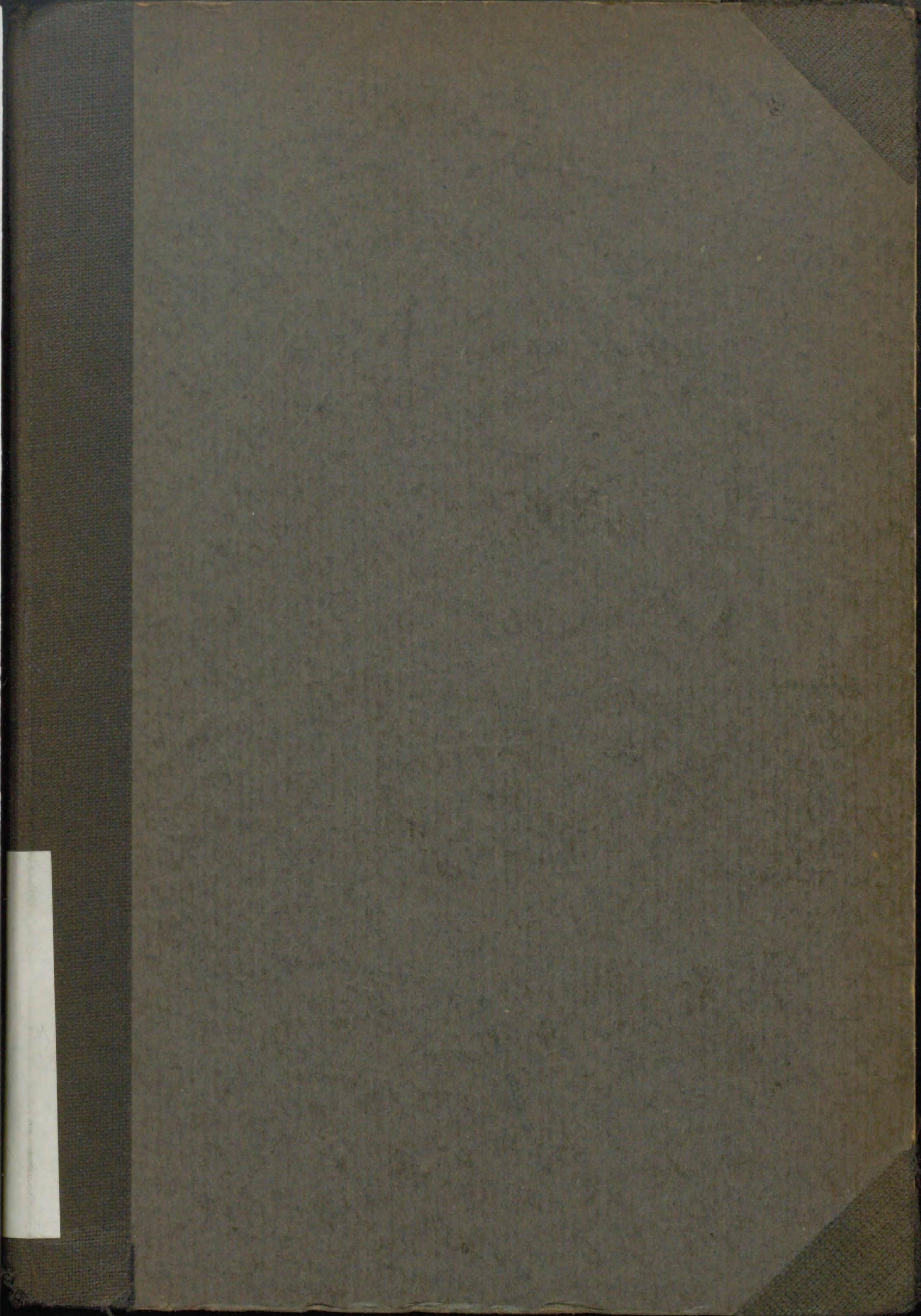
751
21

751
2

751
221

751
221



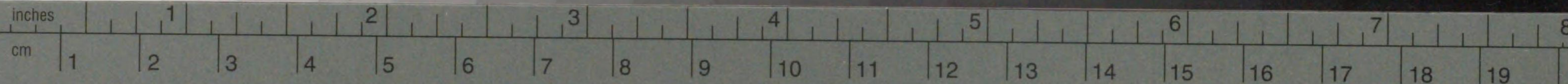


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

